
IS 暁を名乗るもの

海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 暁を名乗るもの

【Nコード】

N5814S

【作者名】

海斗

【あらすじ】

暁の護衛の朝霧海斗をISに入れてみました
禁止区域に住んでいた朝霧海斗は
ある日目の前にISが降ってくる
海斗は一体どうなるか
少しずつ更新していきます

始まり（前書き）

初めて投稿します
頑張ってみます

始まり

何故こんな事になっている

俺は何故IS学園にいるんだ？

それはある日の3月・・・

俺、朝霧海斗は禁止区域に来ていた。

そしたらいきなり空からISが降って来た。

IS<インフィニット・ストラトス>

それは宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ

それが降って来た

「何だ、いつたい」

目の前に現れた噂に聞くISに好奇心を隠せないでいた

「っ！！」

いきなりこちらに向かって銃を撃ってきた

「この野郎！！」

俺は弾を避けISに接近した

「!？」

俺は目の前のISを敵と認識した

(なら容赦する必要はないな・・・)

殺気を放つ

すると驚いたのか向こうは動かなかった

俺は相手の首の裏めがけて跳んだ

そして首をつかんで・・・

(なんだこれは?)

何かが邪魔して掴めない

その何かに向けて殴った

「鎧砕き」

親父が昔教えてくれた古武術だ

そしたら何か碎ける音がした

「そんな!?!、絶対防御を破るなんて!?!」

そして首を掴み

マワシタ

「どうしてこんな物が降って来た?」

死体に乗せたISを見た

するとISがなくなり腕輪になった

「・・・」

俺は近づき腕を？ぎ腕輪を取る

（これがISか・・・）

「くっ！！？」

いきなり何か頭に流れ込んできた

それはこのISに関してだ

そして・・・俺は初めてISを使った

その後ISが落ちたと言われ助けに来た部隊が見たのは

赤

あたり一帯が赤で染まっていた

そこにはただ1人

ISを着た男が悪魔の様な笑みを浮かべ立っていた

その後その男、朝霧海斗は保護され禁止区域は治外法権だと言う事で罪は無く

戸籍を与えられた

そして受験の時にISを起動した男と一緒にIS学園に行くことに

なった

（俺が学園にねえ）

「朝霧君」

「なんだよ」

「え、え〜と、今自己紹介をしてて今朝霧君の番なんだけど・・・」
「わかった」

俺は立ち上がると視線が集まった

「朝霧海斗だ、趣味は読書、よろしく頼む」

座る そうするとクラスがざわめいた

「えっ！？ え〜と次の方お、お願いします！」

そしてしばらくして

「えー・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

俺と同じ男だ。そして何も思いつかなかったのか

「以上です!!」

言い出しやがった。クラスの人はずっこけた

「あ、あの・・・」

（なんだ・・・？）

扉の向こうから何かの気配を感じた
するといきなり扉が開き

「いっー！？」

ものすごい勢いで一夏をシバいていた

「げっ、関羽！？」

パンツ！！ また叩かれていた

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「諸君、私が織村千冬だ。私の仕事は15から16までに鍛えぬく
ことだ逆らってもいいが
私の言うことは聞け。いいな」

と威圧的に女教師こと織斑先生は前で言い放ちやがった

（この女教師、強いな・・・まあ勝てると思うが・・・）

するとクラス中から、黄色い悲鳴が上がった。

飛び交うその黄色い声を拾い上げれば、「千冬姉様」「おねえさま」
「かつこいい」「素敵」といった感じか？

「やれやれ、毎年良くもバカ者が集まるものだな……私のクラスにだけ、集中させているのか？」

もはや恒例行事のようなそれに、織斑先生は頭を押さえた。

「で？挨拶もできんのか、お前は？」

「いや、千冬姉、俺は……」

パアン！！

「織斑先生だ」

「……はい、織斑先生」

するとクラス的女子達がコソコソと話を始めていた。

「え……じゃあ織斑君ってあの千冬様の弟？」

「じゃあ、男でISが使えることもそれが関係しているのかな？」

「いいな～変わってほしいな～」

「静かに！！」

シーン……スゲエ……

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。」

その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。

よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

（お～なんて人だ。弟さん何していいかわからず立ちっぱなだよ……）

そして姉にシバかれていた

始まり（後書き）

きついな

ギリギリセーフ！？

そして1時間目が終わり休み時間・・・

「おい、朝霧」

「なんだ？ああお前は」

「織斑一夏だ、一夏って呼んでくれ」

「ああ、一夏。おれは朝霧海斗だ、よろしく」

「おう、いやーしかし助かったぜ！男1人でここにいるのはきつそうだからな。」

「たしかにな」

「ちょっといいか？」

「え？」

「誰？」

そこには髪の長いポニーテールの女がいた

「箒・・・？」

「知り合いか？」

「ああ・・・」

「廊下でいいか？」

「えっと？」

「行ってこいよ」

「あ、ああ、わかった」

「早くしろ！」

「お、おう！」

一夏と筈と呼ばれた少女は出て行った
そして男1人残った訳だが

（どうしたもんかねえ）

この突き刺さる視線は・・・

（まあ、禁止区域よりかましか）

あそこは油断したら殺されるからな。まだ好機な視線なだけでした
ハイエナのように群がり人を襲うことがよくある
まあ、もうそんなことはしばらく起きないだろうが・・・
すると

パン！！！！

「とつとと席に着け、織斑」

「はい・・・織斑先生」

叩かれ帰ってきた一夏が反泣き状態だった

side一夏

2時間目

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証
が必要であり、

枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

ペラペラと山田先生が喋る

（わかんねーーーー!?）

内心かなり焦っている男が1人いた

（なんだこのアクティブなんちゃらって!? わかるのか朝霧は・・・）

となりのもう1人の男、朝霧を見ると

（寝てるーーーーー!?）

馬鹿な!? 命が要らないのか!? あの手冬姉が後ろに居るんだぞ!?
すると朝霧に気付いたのか手冬姉が出席募をもってこっちに来ていた

（ご愁傷様・・・）

s i d e o u t

（ん?）

誰かがこちらに近づいてきている

そして後ろから頭に振り下ろされるなにかを掴み捻り上げた

「っ!？」

そして目を開けた海斗の見た光景は・・・

腕を捻り上げられた織斑先生と

それを見て驚くクラスの一同だった

（やべ！？）

「おい、朝霧」

「な、なんだよ織斑先生（汗）」

手を離し織斑先生を見た

「ほう、そういう態度をとるのか・・・いきなり教師に暴力行為をとるとはな」

「いや、これは無意識なんで」

「無意識で教師の腕を捻り上げるか。そうか、お前には罰をやるう」

「内容は？」

「グランド20週だ。しかしチャンスをやろう。お前は寝ていたな。教科書6ページを教科書を見ずに言えたら許してやるう」

（な、なんて鬼畜な・・・）

クラスに居る人全員が思った

授業を聞いていてもこれは難しい

聞いてないならなおさらだ

すなわち織斑先生は20週走らせる気だ

しかし当の本人は

（マジで！？ラッキー！！）

1ヶ月の間暇だったため参考書を丸暗記している海斗にとっては

「現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISだが、その中心たるコアを作る技術は一切開示していない。」

現在世界中にあるIS467機、

そのすべてのコアは天才篠ノ之博士が作成したもので、

これらは完全なブラックボックスと化しており、

いまだ博士以外はコアを作れない状況にある。

しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、

各国家・企業・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して

研究・開発・訓練を行っている。またコアを取引することは

アラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されている。」

クラスの連中や織斑先生までも驚いている

「あ、ああ、座っていいぞ朝霧。」

こうしてその後一夏がわからないと告白して織斑先生に1週間で覚えろと言われ2時間目が終わった

ギリギリセーフ!?(後書き)

学校が

馬鹿？

休み時間

「頼む朝霧！ISについて教えてくれ！！」
「は？」

いきなり一夏に頼まれた

「まあ、わかる範囲ならな」
「ありがとう！！」
「あと朝霧はやめろ。苗字は嫌いなんだ」
「わ、わかった。海斗でいいか？」
「ああ」

「ちょっと、よろしくて？」

「一夏、呼ばれてるぞ」
「おっ俺！？」
「貴方もすわよ」
「俺はテメーなんざしらねえーよ」
「まあ、なんですの、そのお返事。」
私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、
それ相応の態度と言うものがあるんじゃないかしら？」

「・・・・・・」

あゝそういえば外では女が偉いんだっけ？
あそこでは女はかぎり無く弱者なのに・・・

すると一夏が

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし・・・」

「私を知らない？ セシリア・オルコットを！？」

イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を！？」

「なあ海斗」

「なんだ？」

「・・・代表候補生ってなに？」

その瞬間、教室中の生徒がズツコけた。

「あ、あ、あ・・・。あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「国家を代表する候補になった人のことだ。単語の意味考えろ。」

代表になれるかも知れない人だからまあ・・・国家のエリートみたいな奴だよ」

「うっ・・・言われてみればそうだな・・・」

するとセシリアは

「そう！ エリートなのですわ！ 本来なら、

私のような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡！
幸運なのよ！ その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「どうでもいい」

「・・・馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言っただろうが・・・」

「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い」

「きくく！！本当に期待していた私が馬鹿みたいですわ！」

「いや、馬鹿だろ（ボソ）」

「ナニカイイマシタカ」

「いえいえなにも」

「と、とりあえず俺に何かを期待されても困るんだが」

「まあ…、ISの事で分からない事があれば、

泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくつてよ。

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

チヨンチヨン

「ん？」

肩を一夏が叩いてきた

「なあ海斗、入試ってIS動かして闘うってヤツだったよな？」

「そうだが」

「それなら俺も倒したぞ、教官」

「へえ」

「は・・・」

この会話を聞いていたオルコットさんは口を開けて驚いた。

「わ、私だけだと訊きましたが？」

「女子では、と言うオチじゃないか？」

「馬鹿だww」

「あなたも教官を倒したっていうの!？」

「海斗は？」

「・・・ぼろ負けだ」

「無視しないでくださーい!!」

そのときチャイムが鳴った。

そのチャイムの音で頭に血が上って興奮状態だったセシリアも落ち着きを若干だが取り戻し、こう言った。

「話の続きはこの後でよろしいですわね!？」

「断る」

「っ!？お、覚えときなさいよ!!!」

そう言い捨てて自分の席に戻っていった。

殺気

3 時間目

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い、教壇に上がっているのは山田先生ではなく、織斑先生だ

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな

クラス代表者とはそのままだの意味だ。

対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席…まあ、クラス長だな。

ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの实力推移を測るものだ。

今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。

一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

（やばい！）

多分クラスの女子が調子に乗って俺や一夏を推薦するだろう

「自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

その事が織斑先生の口から発せられると。クラスの女子は

「はいっ。織斑君を推薦します!」

「ええ!!??」

「それじゃあ、私は朝霧君を推薦する!」

(やっぱり・・・)

「ちょ、ちょっと待った!俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権はない。選ばれた以上は覚悟をしろ。」

「はい・・・」

意思弱!?

しかし

「納得がいきませんわ!!」

(おっ!お馬鹿さん登場!!)

「変なこと考えないでくれます!?!」

「心読むな・・・」

「とにかく!男がクラス代表だなんて、いい恥晒しですわ!!」

このセシリア・オルコットに、そんな屈辱を

一年間も味わえとおっしゃるのですか!?

大体、文化としても後進的なこんな腐った国で

暮らさなくてはいけない事自体、

耐え難い屈辱だというのに・・・!!」

「・・・イギリスだって、大したお国自慢は無いだろ。

世界一まずい料理で何年覇者だよ?」

（うお！？一夏が怒った！？）

日本を馬鹿にされたのが許せないのか一夏が言い返す
まあ・・・俺もこの国は腐つてると思うんだがなあ

「あ、あなた、私の祖国を侮辱しますの！？」

「馬鹿が先に侮辱したよな？」

「っ！？、け、決闘ですわ！！！」

怒りを込めた指先を突きつけ、セシリアが叫ぶ。

「いいぜ？ 四の五の言うよりは、よっぽど分り易い」

「おおっ！頑張れ一夏」

「貴方もですわ！！！」

「え〜〜・・・」

「と、とにかく！私が勝ったらあなたを小間使い・・・
いえ、奴隷にして差上げますわ！！！」

「好きにしろよ。で、ハンデはどのくらいつける？」

「あら？早速ハンデのお願いかしら？」

それをハンデの申し入れと思ったのか、セシリアがフフンと鼻を鳴らした。

「違う。」俺が”どのくらい、ハンデをつければ良いかって事だよ」

「は・・・」

「「「え・・・」」」

クラスの空気が固まった
そして

そして、クラス中が爆笑した。

「ちょっと織斑君、それ本気？」

「男が女より強いなんて・・・ISが出来る前の話だよ？」

「もしも男と女が戦争したら、三日持たないって言われてるのに」
次々に飛ぶ言葉。一夏は下を向いた・・・

（やれやれ・・・少しは助けるか）

そして・・・

side一夏

「俺が”どのくらい、ハンデをつければ良かった事だよ」

「は・・・」

「え・・・」

クラスの空気が固まった

そして

そして、クラス中が爆笑した。

「ちょっと織斑君、それ本気？」

「男が女より強いなんて・・・ISが出来る前の話だよ？」

「もしも男と女が戦争したら、三日持たないって言われてるのに」
こんな事を言われた時俺は相当悔しかった

（糞！！！！）

そんな事を考えていると

ダ
マ
レ

「「「「「！！！！？？？」「「「「「

（なんだ！？）

この教室に満ちた強大すぎる殺気

あの千冬姉ですら満足に動けていない

そして隣で冷徹な表情で俺たちを見下ろす海斗がいた

s i d e o u t

ダ
マ
レ

俺は殺気を放ち言い捨てた

立ち上がるとクラスに居る人は脅えた表情で見ていた

「お前ら男を馬鹿にし過ぎなんだよ。体の出来からして男が上だし、頭の良い歴史的偉人だって男が多い。男のほうが平均的に優れた生物だ。」

お前ら下等の生物が調子に乗りすぎだ。」

「か、海斗！？」

横で一夏が途惑っている

「少し黙ってろ、こんな馬鹿共には言わないとわからない」

「な、何が下等な生物よ！今の世の中は女尊男卑でしてよ！

「それでは勝負は一週間後の放課後、第三アリーナで行う。そうだな、始めにオルコットと二人のどちらかが試合、その後に勝ったほうが残ったもう一人とでいいだろう。各自準備しておくように。」

それと朝霧、あまり殺気を放つな。次は反省文だぞ」

「わかった」

「それでは授業を始めるぞ。」

こうして重い空気の中、授業が始まった

最初は空気悪かったが

「あ、あのー、先生。もしかして、篠ノ之さんって篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

空気を変えるためか行き成りそんな事を言い出した

「そうだ、篠ノ之はアイツの妹だ」

「「「えー！ー！ー！」」」

（へえ・・・）

その瞬間、クラスが驚嘆の声に包まれた。それはそうだろう、篠ノ之束と言えばもはや世界中で知らない人はいない程の超有名人だ。

しかも現在行方知らずの為、世界中の国や企業が探している。そんね人物の身内が目の前にいるという事実が彼女たちを興奮させ、様々な質問が飛び交う。

・・・が

「あの人は関係ない！」

箒はその空気を一言で斬りはらった。

「私はあの人じゃない。教えられるような事は何もない」

箒が言い終わるとクラスが先程とは一変して静寂に包まれた。

「山田先生、授業を」

（このタイミングでバトンタッチとか鬼かよ！？）

この人は無理に逆らわないと誓った

殺気（後書き）

台詞難しいな

侵入

放課後

「うつゝ・・・」

「頑張れ」

「お前も本読んでないで助けるよ!？」

「えゝゝゝ」

「ああ、よかったまだ教室にいたんですね」

「ん？」

そこにいたのは書類を片手にもった山田先生がいた。

「何の用だ？」

「えっと、寮の部屋が決まりました」

「あれ？部屋割り決まってるじゃないやなかったですか？」

前に聞いた話だと一週間は自宅から通学してもらうつて聞いてたんですか？」

「俺は野宿だが」

「「野宿!？」」

「どうでも良いだろ、で？」

「あ、はい！」

慌てた様に言う

「それで二人は事情が事情なので政府から急な要請で一時的な処置として

無理やり場所を確保したらしいですよ。そこらへんのことなにか聞

「います?」

最後コソコソと言ってくる

2人で首を振る

「まあ、それで部屋なんですけど、一つが相部屋もう一つが1人部屋になります。

一月もあれば部屋が確保できるのでそれまではがまんしてください。どちらにするかはそちらに任せますね」

「「1人部屋で」」

かぶった 相部屋なんて冗談じゃない!!俺は1人じゃないと寝れないんだよ!!

「なあ、一夏」

「なんだよ?」

「譲ってくれないか?」

「断る!!」

「なあ、山田先生」

「は、はい!」

「相部屋の女子は誰だ?」

「え!?え〜と?」

「わからんのか!」

「篠ノ之箒だ」

行き成り現れ質問に答えたのは、織斑先生だった

「よし、一夏相部屋決定!」

「何で!？」

「幼馴染じゃなかったか？」

「だが!？」

「知らない人より良いじゃねーか」

「で、でも!！」

「よし決まりだ」

「わかったよ・・・寮に入るならさっさと家に帰っているいろいろ準備しないといけ

「そのことだが私が手配しておいた。ありがたく思え」え!？」

「といつてと、生活必需品だけだな。」

着替えと携帯電話の充電器ぐらいあればいいだろう」

現状必要なのは揃ってるな

「じゃあ、時間を見て部屋にいつて下さいね。夕食は6時から7時、

寮の一年生用食堂で取ってください。

ちなみに各部屋にはシャワーがついてますが、

大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますが

・・・えつと、その、織斑君たちは今使えません」

「え?なんでですか?」

一夏が納得できないのか抗議の声を上げる。

「馬鹿かお前、同年代の女子と一緒に風呂に入りてえーのか?」

「あー・・・」

「お、織斑君たち!女子とお風呂入りたいんですか?!だ、ダメですよ!」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ!?!女の子に興味が無いんですか!?!」

そ、それはそれで問題のような・・・」

「はあゝもう良いから黙れ・・・」

コホン

「え、えっと！それじゃあ私達は会議があるのでこれで！

2人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃ駄目ですよ」

（ああ、会議に呼びに来たのか）

すると急いで出て行った

「行くか」

「おう、わかった。」

寮

「俺は1024、一夏は1025か・・・隣っぼいな」

「まあ、遠くよりは良いんじゃないか」

「ちがいないえ」

すると1024号室の前に来た

「じゃあな、一夏」

「おう、またな海斗」

それぞれの部屋に入っていく。そして

「広い・・・」

こんな豪華な部屋には入ったこと無い
少し感動していた
すると

バンツ！！

（なんだ）

玄関からだ 行ってみると

「ゼーハーゼーハー」

息が切れたたった数十秒前に別れた友達だった

「どうした？」

「た、頼む！何も言わず隠まってくれ！！」

「あ、ああ・・・」

数分したら出て行った
何だったんだ？

「寝るか」

周りに警戒しながら意識を沈めていく
すると

ジジジジジ

すごく小さな音だが明らかにおかしい音がする

（どこだ？）

耳を澄ますとコンセントの方だ

（まさか・・・）

そう思い寮長室に向かった

「入るぞ」

ガチャ

「いない？」

「後ろだ、馬鹿者」

「え！？」

後ろ10mの所に織斑先生がいた！？

マジ！？俺が後ろからの接近に気が付かないだと！？

「気配を消していたからな。」

そういつて近づいてくる

「極め付けに読心術ですか・・・」

「どうでもいいだろう、それより何の用だ？」

「ドライバーが借りたいんすけど」

「わかった、かしなんに使っんだ？」

「ちよつと野暮用があつてな」

「？まあ待ってろ。取ってくる」

そういつて中に入つていった

（しかし散らかつてるなー）

「朝霧つて何見てるんだ、お前は？」

「・・・何も」

「まあいい、ドライバーだ」

「助かった、明日返す」

「ああ、おやすみ」

「・・・ああ、織斑先生」

そして

（やっぱり・・・）

盗聴器があつた

（つまり一夏の部屋にも・・・）

盗聴器がある可能性が高い

俺は盗聴器を外すと握りつぶし一夏達が寝るのを待った

（そろそろか？）

今夜の1時を回った

（いくか・・・）

俺は気配を消して部屋を出た

そして隣の部屋に来てポケットから例の物を出す

ピッキングツールだ

ガチャガチャ、カチン

そして扉が開く

物音を立てない様にして耳を澄ます

……ジジジジジ

聞こえた

（行くか）

中に入る

すると一夏と篠ノ之が寝ていた

（ああ、なるほど）

別れてすぐに来た理由が大体わかった
大方篠ノ之の着替えでも見たのだろう

（さて）

俺はコンセントに向かう

（懐かしいな、昔はこうやって他人のテリトリーに入って
無茶したもんだ……）

そしてコンセントを取りし盗聴器を外しコンセントを取り付けた

（終わったな）

俺は部屋を出て行く

扉を閉めピッキングツールで鍵を掛け自分の部屋に戻る

（さてと・・・）

盗聴器を潰した

「寝るか」

そして俺は眠りに付いた

侵入（後書き）

書置きが無くなって来た

朝飯

次の日

side 一夏

箸と食堂で朝食を食べていると、
そこら中の席からひそひそ話が聞こえてきた。
まだまだ、俺は珍獣らしい。

「織斑君・・・隣、いいかな？」

と、そこへ同じクラスの三人がやって来た

「ああ、別にいいけど」

「やった〜！！」

喜ばれた 確か名前は・・・のほほんさんでいいやww

「ああ、早く声掛けとけばよかった」

「まだ二日目焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ！」

「なんですって!？」

周りが騒いでいる、なんだろう？

「わー織斑君朝からよく食べれるね〜」

いきなりのほんさんに話しかけられた

「俺は夜少なめ取るタイプだからな。

朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「そついうお前達はそれだけしか食べないのか？」

三人組は物こそ違うが、パン一枚飲み物おかずが一皿しかなかった。

「わ、私たちは、ねえ？」

「へ、平気かな」

燃費いいな。たしかに食べなくてもなんとかなるが空腹は空腹だしな。

その燃費が羨ましい。

「お菓子よく食べるし！」

「……」

無言で顔を合わす俺と篤。おそらく同じことを考えたのだろう。間食は太ると。

そついえば、女子は食事を減らしたり運動してダイエットしようとするが、

お菓子はやめないのは不思議だな。

すると

「よお」

「おう、海斗、おはよう」

「座らせてもらっぜ」

「はっ、はい！」

隣の子が驚いていた

「一夏、参考書読んだか？」

「まだ・・・」

IS・・・そういえば

「なあ、箒」

「ん、なんだ」

「ISについて教えてくれないか」

「な！？何故私なんだ！？」

「東さんの妹だから」

「そ、そうか・・・」

すると

「ねえ、キミ達って噂の子でしょう？」

「一夏、お客様だぞ」

「おい！？」

「君達さあ、代表候補性の子と勝負するんでしょう？」

「ええ、まあ」

「だるいけどな」

「君達さ・・・ISの稼働時間どのくらい？」

「多分30分ぐらいかと」

「知らん」

「そんなんじゃ、絶対無理よ。だから、私が教えてあげよつか。ISのこと」

おっラッキーだ

「あり「それなら私が教えますので結構です」・・・」
いきなり箒が口を挟んできた。

「でも、あなたも一年「私は――」」

「篠ノ之束の妹ですからっ」

それを聞くと相手も去って行った。
もうこれは箒にISのこと教えてもらうことになったようだ

「ありがとな、箒」

「ふ、ふん！！先行くぞ、放課後剣道場にこい！」
「あ、ああ」

「織斑君つて、篠ノ乃さんと仲いいの？」

「仲か・・・いいほうなんだろうな」

「ああ、まあ、幼馴染だし」

私たちにとってはさほど重要なことではないのだが、
周りは大いにどよめいた。どこから驚愕の声が上がるほどだ。

「え、それじゃ・・・」「いつまで食べている！」
食事は効率よく食べる！遅刻したらグラント十週させるぞ！」「！？」

隣の人がなにやら聞こうとしたとき食堂によく響く声、千冬姉の声
が響き渡る。

途端に食堂にいた全員が慌てて朝食を取るのを再開した。

「まず!？」

「先行くわ」

「海斗!!？」

海斗は逃げる様に出て行った

side out

放課後 剣道場

「何で朝霧が居るんだ？」

「見学」

「・・・」

篠ノ之が睨んでる。おお、怖！

「まあ、来てしまったのなら仕方ない。

朝霧、お前何か武道に心得はあるのか？」

「・・・」

「ん？どうした」

今頭を過ぎったのは、親父が叩き込んだ古武術、
しかも殺すこと前提の武術だ

「古武術を少し・・・」

少しなんてもんじゃない

2・3年はしたはずだ

「そうか、なら出来ないな。では見ている。今から一夏と手合わせする」

「え、だから俺はIS——」

「つべこべ言わずに構えろ！」

箒は一夏に突っ込んでいった

「くそっ！」

一夏は竹刀で箒の竹刀を受け止めていた

2、3合打ち合っていると

パン！！

一夏の頭に箒の竹刀があった

「どういうことだ」

「いや、どういふ事って言われても・・・」

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「・・・中学では何部に所属していた」

「帰宅部。3年連続皆勤賞だ」

プチ

「プチ？」

何か聞こえてはいけない音が聞こえた

「——なおす」

「はい？」

「鍛え直す！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後3時間、私が稽古を付けてやる！」

「え？それはちよつと長いような——ていうかISの事をだな！？」
「だから、それ以前の問題だと言っている！」

そして竹刀を構えると

「構えろ一夏！今から叩き込んでやる！！」

「ぎゃあああ~~~~~！！！！」

剣道場に一夏の断末魔が響く

（頑張れ……）

そして隅でその様子を眺める海斗がいた……

朝飯（後書き）

書置きが

あとなんとかして

暁の護衛のキャラ出せました
これからお願いします

バトル1

そして1週間後・・・

「なあ、箒」

「な、なんだ？」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「・・・」

「目をそらすな」

一夏が篠ノ之に言い寄っていた

「し、仕方がないだろう。お前のISもなかったのだから」

「それでも知識とか基本的な事とか、他にも教えられるとこあっただろ！」

「うっ」

「うわ！？涙目だぞ、篠ノ之！？」

「おい、一夏、お前から試合なんだぞ、少し落ち着け」
「くっ」

は~~~~~ 何やってたんだこいつ等
結局ISの修行はしてないらしい
すると

「織斑く〜ん！、朝霧く〜ん！」

山田先生が来た

「どうしました？」

「きつ、来たんです！2人の専用ISが！」

「本当ですか！？」

「へへへ」

「じゃあ、付いてきてください」

あわてながら山田先生は俺達をにピットへ案内した。
すると、そこには待機形態のISが2つあった。

「これが織斑君の専用IS『白式』と朝霧君の専用IS『暁』です！」

「おおっ！！」

「これが・・・」

俺のIS、暁・・・

「織斑！身体を動かせ。すぐに装着しろ。
時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ、
できれば負けるだけだ。わかったな」
「了解です」

純白のISに近づき、触れる一夏。

「背中を預けるように、ああそうだ。
座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

織斑先生に言われた通りに、白式に身体を任ていた。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。」

・・・一夏、気分はどうだ？」

「千冬姉、大丈夫だ、問題はない」

「大丈夫そうだな。ならば行ってこい！」

「はい！」

「海斗、千冬姉、箒、山田先生、行ってくる」

「ああ！言って来い一夏！！」

「一夏」

「なんだ海斗？」

「・・・相手が銃を構えた瞬間右に飛んで、その後相手に向かって飛べ（ボソ）」

「え！？」

「いいな？」

「おっおっ・・・」

「・・・頑張れよ」

「！？、ああ！行ってくる」

予想外の言葉に驚きと嬉しさが混じっていた

side一夏

「あら、逃げずに来ましたのね」

「まあな」

「まあ、最後のチャンスをおげますわ」

オルコットがビシッ、と人差し指を俺に向けて突きだして言う。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。

ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、

今ここで謝るといふのなら許してあげないこともなくってよ」

——警戒、敵IS操縦者のISが射撃モードに移行。
セーフティのロック解除を確認。

「いらなねえよ、全力でこい!!」

「ボロボロにしてさしあげましてよ!!」

銃を構える

(たしか右に飛ぶんだっけ……)

友達からの助言を実行し、右に飛ぶ。すると

ビュン!

さつき居た場所にレーザーが飛んできた

「え!?!」

オルコットは自分が打つ前に避けられたのに動揺し、一夏は言うとおりにしたら避けれたことに驚いていた

(マジ!?!あいつ何者だよ!?!未来が分かるのか!?!
まあいい、次は相手に向かって飛ぶ!!)

一夏がオルコットに向かって飛ぶと驚いていたオルコットは反応が遅れていた

(いける!武器は……ブレード1本!?!しょうがない!)

俺はブレードを出すとオルコットに切りかかった

「くっ!!」

オルコットはまともに一夏の攻撃を喰らっていた

(離れなければ!!)

オルコットそう思いは離れて体勢を立て直そうとする

しかし

「きゃ!?!」

一夏は離れまいと必死に喰い付いていた

(こうなったら仕方が無いですわね・・・)

そして

ビュン!!

ビットからレーザーが放たれた

side out

「離されたな。普通ならもう少し削れただろうに。

さすが代表候補生・・・」

「でも凄いですよ、織斑君。とてもISに乗るのが二回目とは思えませんよ。」

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。」

あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「へ」

そんな癖があるのか、アイツ

（一夏・・・）

そんな中箒が唇を噛んでいた・・・

side 一夏

（なんだよ、あのビット！？）

滅茶苦茶ウザイ！

最初にたくさんシールド・エネルギーを削ったが
追いつかれていた

（毎回毎回死角ばっか撃ちやがって・・・そうか！！）

一夏はすぐさまその場所から離れ距離をとる。

そして、オルコットは周囲に待機させていたビットを一夏の方へと
向かわせた。

次々と放たれるレーザーから避け、一閃、近づいてきたビットを真
っ二つに切り裂いた。

二つに斬られたビットは青い電撃を走らせながら、爆発した。

さらに違う空中で飛んでいたビットを真横から一閃をいれ、爆発させた

「なんですって!？」

驚愕したオルコットさんに焦りが見え始める。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！ しかも、お前はその間制御に意識を集中させてるからそれ以外に攻撃ができない!!」

「っ!？」

(ビンゴ!!)

「いける!!」

オルコットの間合いに入った俺は、ブレードを振り下ろし3つ目のビットを破壊、

そしてそのまま体を回転し4つ目のビットを斬り落とす

さっきからずっと俺を苦しめてきた兵器4つすべてを斬り落とした。

俺は近づき斬ろうとする

「——かかりましたわ」

セシリアの口元がやり、と歪み、笑うのが見えた。

（まずいっ！）

俺の中で反射的にそう思い距離を置こうとするが、逆に俺の体のほうが間に合わなかった。

ヴウウンッ

電子機械が起動する音が耳に入り、セリシアの腰部から広がるように付いているスカート状のアーマーから、部分的に何かが外れて動き出す。

「ブルー・ティアーズは6機ありましてよ!!」

ドガアアアアンッ!

s i d e o u t

バトル1（後書き）

ハイキングがきつかった

バトル2

「あゝ！！織斑君！」

「一夏あ！！！」

やられたと思っている山田先生と箒は驚いている

「くくくww」

「な、何を笑っている朝霧！？」

「ああ、海斗でいいよ、篠ノ之」

「え！？なら私も箒で・・・ってこんな事ではない！！
何故笑っていたのだ！？」

「ああ、一夏はまだ負けてねーよ」

「「ええ！？」」

「機体に救われたな馬鹿者め・・・」

side 一夏

（クソッ！！不味い！！）

ミサイルが放たれていた

（どうすればいい！？）

——フォーマットとフィッティングが終了しました。
確認ボタンを押してください。——

！？

俺は無意識で確認ボタンを押していた

そして・・・変化した白式が飛んでいた

「ま、まさか一次移行！？ あなた、初期設定の機体で、
今まで私と戦っていましたの！？」

「危ねー、助かったぜ。」

さあ、始めようぜオルコット！！本番だ！！！！」

武装展開 雪片式型

（これは雪片！？千冬姉が使っていた刀！？）

手にある刀を見て驚く一夏

「なるほど。俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「・・・は？あなた、何を言って——」

「とりあえずは、千冬姉の名を守るさ！」

「ッ！？」

ありえない速度で迫る一夏

オルコットはライフルを焦って撃つが当たらない

（いける！！）

懷に飛び込んだ一夏は一閃を放つ前に

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

「「はい？」」

負けた
そして

「馬鹿者め……」

「くくく、ははは、わああっはっはっは……!!」

Aピットに呆れる千冬姉と爆笑する海斗が居た

Aピット

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。
それでこの結果か、大馬鹿者」

オレがAピットに着くと千冬姉によって、
俺は馬鹿者から大馬鹿者へとランクアップしたよ
ちくしょう

side out

「くくくww」

面白いww特に負け方が面白いww
終わった瞬間「はい？」「だとww
はははははははははは……!!」

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。
それでこの結果か、大馬鹿者」

怒られてるよw

「武器の特性を理解せずに使うからああなるのだ。身をもつてわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があったらISを起動しろ。いいな」

「・・・はい」

一夏は真面目にへこんでいるらしく、大人しく首を縦に振る。

「でもよ・・・海斗、なんで最初の攻撃が解ったんだ？」

「何・・・？どういう事だ、一夏」

織斑先生が睨んできた

「いや、最初に相手が銃を構えた瞬間右に飛んで、その後相手に向かって飛べってアドバイスをくれたんだ。実際に成功した時は本当に驚いたよ」

「本当か、朝霧？」

「・・・」

「海斗？」

「・・・ああ、本当だ」

「何故解った？」

「・・・どうでもいいだろ」

「言えるか、経験上ああいう奴は最初に油断して仕掛けてくるなんて・・・」

「まあ、次は俺か・・・まあ、まだ3日は無さそうだな」

「どうしてだ？」

「お前がビット全部叩き斬ったからな」

「しょうがないだろ!？」

「まあ、助かったよ、俺も少し改造しないと・・・」
「なんでだ？」

篤が聞いてくる

「ああ、俺のISに武器が無かったんだよ」

「「「「は?」「」「」」」

織斑先生までも変な声をあげる

「だから武器が無いんだよ。」

だから訴えにISの研究所に行こうかと。

織斑先生、どこに行けばいいんだ？」

「あ、ああ・・・倉屋敷重工業に行くといいぞ」
「ありがとさん」

俺はAピットを出て行った

バトル2（後書き）

やっと暁の護衛のキャラが出てきます
あと少しづつ文が短くなるかも

倉屋敷重工業

放課後

俺は今、曙東市の倉屋敷の本社のビルの前に居る中に入ろうとしたら

「少しお待ちください」

「なんだ」

「今回はどのようなご用件で？」

「IS学園から来た、ISについてだ」

「少々お待ちください」

ガードマンの1人が確認に向かうしばらくすると

「確認が取れました。中にどうぞ」

「ああ」

中に入ると秘書の方に案内され研究室に案内された

「ここになります」

「わかった」

「亜希子様、IS学園の生徒が来られました」

「あゝいれていいよ」

「では、どうぞ」

俺は扉を開ける

「入るぞ」

「何よ、こんな忙しい時期に来て？」

「どこの誰だかしらな——」

「どうした？」

行き成り社長さんの言葉が止まり体が震え始めていた

「大丈夫か？」

心配になって近づく

「く」

「く？」

「くりそつじゃないの~~~~~」

「な!？」

いきなり抱きついてきた!!何だコイツ!?

「久しぶり~~~~~!!覚えてる?私よ!亜希子」

「少なくとも俺の知り合いにこんなイカレた女は居ない」

「あ、そっか、私達初めて会ったのよね」

「.....」

「いや、昔の知り合いにそっくりなのよ、あなた」

何なんだ、この女?

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は倉屋敷亜希子」

この倉屋敷重工業の社長です」

「.....朝霧海斗だ」

「朝霧.....」

行き成り顔が引き締まる

「ねえ、海斗君」

「なんだ」

「君のお父さんって・・・雅樹？」

「！！！？？」

絶句した

こつちの世界に親父の知り合いが居るとは思わなかった

「やっぱりね」

「なんで・・・なんで知っている！！！？？」

「知ってるわよ。だつてくりそつと私は、

同じ学校の同級生だったから」

「」

何も言えなかった

あの親父が・・・あの悪魔が学校に通っていた？

嘘だ、有り得ない、あの男が

「そして貴方がまともじゃない道を歩いてきたのも知ってる」
「ッ！？？」

それは詰まり暁東市のトップシークレット、

ここに居る人のみが知る場所、

禁止区域の出身である事を知っているという意味だ

反射的に拳を握ると

「別に何もしたりしないわよ」

「……………」
「だからあえて伏せながら言ってるんじゃない」
「……………」

今は大丈夫そうだ

「後、1つだけ聞かせてほしいの」
「なんだ？」

「君のお父さんとお母さん、雅樹と百利は元気にしてる」

百利……それが俺の母の名前……

「……………」

「ま、まさか——」

「……死んだよ、両方とも」
「ッ!？」

母の事は知らんが少なくとも親父は俺が——

「わかったわ……」

「亜希子さん……」

「もうこの話は終わり!それで何の用があつて来たのかしら?」

「あ、ああ……ISに武器を付けて欲しくてな」

「IS?」

「ああ、俺ISに乗れるのよ」

「え、え—————!!??」

ビルに響き渡る大声

「マジ!？」

「ああ」

「へー！そっか。じゃあISを見せて」

納得早！？まあ助かるんだが

「はら」

「ありがと[♪]」

カタカタとパソコンを操作し始めた

「うそ！？これは！？」

「どうした？」

「武器が無い理由、わかったわ」

「何でだ？」

「このISは機動力と防御力に特化しすぎなのよだから武器は付けられない」

「付ける方法は？」

「機動力が防御力、どちらかを削ることよ」

「なら——を作ってくれ」

削るのは防御すべて。あ、腕と脚はそのままです」

「え！？でもそんな事したら紙並みの防御力になるわよ！」

「構わない。じゃあ、3日以内に頼む」

「ちよ、ちよつと――」

亜希子さんが抱きついてきた

「お母さん……いぬね」

┐
┐
•
•
•
•
•
┐
┐

何か知らん金髪の女にそれ以外にも6人の学生が後ろに居た

倉屋敷重工業（後書き）

古武術の技、使えそうなの教えてください

バトル 倉屋敷ビル

「・・・誰っすか？」

亜希子さんに聞く

「私の娘とその友達・・・」

「え、娘！？」

「一児の母でっす」

「まじ！？」

「な、な、な、何してるの！？お母さん！？」

「不倫現場？」

「それはすこしドキドキします」

「不倫！？お母さん、今不倫してるの！？」

「ちよつとまって妙！？」

「構わない、侑祈、殺っちゃって！！」

「わかったよ、妙チン！！」

「なっ！」

何だコイツ！？普通ならこんなに早く動けないぞ！？

「クソ！！」

とりあえず腕をとって・・・

ビュン！！！！

（なっ！？）

早！！嘘だろ！？
顔面に拳が触れた

（しょうがない・・・無傷で捕らえるつもりだったが・・・多少の怪我は勘弁してもらおう！！）

俺は拳の力を受け流す様に回転しそのまま懐に入る

その勢いで

「裏拳」

首の辺りを狙い吹っ飛ばした

[illegible]

はたから見ると侑祈が殴った瞬間飛んでいった様に見える

「何だとおくく!?」

侑祈は自分が吹っ飛んでいくなんて考えてなかっただろう
それなのに吹っ飛んでいき、壁にめり込んだ

1

ここに居る海斗以外の人間は絶句していた

何故なら彼が人間ではなくロボットだと知っていたからだ

「くそお～～～～！！体がうごかねえ～～～～！！！！」

「お前、人間か？」

あれ喰らって動けるの親父くらいだと思っていたが

「どいて、薫」

「か、神崎様！？」

ドン！！

ゾクッ

（マズイ！？）

その場から跳んで回避する
するとその場所が凹んでいた

「へー、お前も空気を飛ばせるのか！！」

「はずした・・・」

「僕らも続くぞ、薫！」

「ああ、わかった、尊徳！」

「めんどくさいな・・・」

何でISの装備のことを聞きに来たら戦闘になるんだよ

「まて！落ち着け！話し合おう！」

「問答無用！！」

「そうだ！僕らの親友を傷つけたんだぞ！落ち着けるか！」

「は~~~~~」

使いたくなかつたんだがな

オ チ ツ ケ

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」

全員海斗の放つ殺気で本能的に悟った

ああ、この人には敵わないと

「は~~~~やつと落ち着いたか」

ようやく殺気を解く

「じゃあ、亜希子さん。俺帰るからちゃんと説明しろよ
ISは置いて行く。できたら完成させてくれ」

「えっ、ええ、わかったわ」

「それじゃ」

そうしてビルから帰っていった

バトル 倉屋敷ビル（後書き）

短いかな？

もうすぐゴールデンウィーク

更新が止まったら

ゴールデンウィークが終わった時にまとめて
更新します

禁止区域 比佐深駅

倉屋敷のビルの帰り・・・海斗は禁止区域に向かっていた

比佐深駅

禁止区域にある封鎖された地下鉄の駅のことだ
俺は地下に入ると懐かしい顔が見えた

「よお、相馬」

「む！海斗か！？」

コイツは相馬忠夫、この比佐深駅において、
絶対の信頼を寄せられる男、元特殊機動隊所属のエリート

「ああ、そうだ。五十嵐に用があるんだが・・・」

「そうか、五十嵐さんなら自室に居ると思うぞ」
「わかった」

そついい自室に向かう

（海斗め・・・雅樹に似てきているぞ・・・）

相馬はかつて海斗の父親である

雅樹と拳を交えたこともある

その時の恐怖は今でも忘れることはできない

（雅樹をこえるか・・・）

相馬はただ立ち去る海斗の背中を見ていた

「見つけたわよ、あたしの玩具♪」

「誰が玩具だ！舞！！」

「あ・ん・た♪」

コイツは舞、五十嵐の娘、

だが父親であつても一切信用しておらず、

ただ自分の欲望のため、生き残るために戦い続けている
ちなみに戦闘卿

「勝負よ」

「やめなさい、舞。あなたじゃ勝てないわ」

「なによ、楓。勝てるに決まってるじゃん」

「楓のいうとおりによめて欲しいんだが・・・」

相馬楓、相馬忠夫の娘

喜怒哀楽の変化に乏しく、

父親以外の命令は一切聞かない。

人を殺めることを幾度となく経験しており、
命を奪うことへの迷いはない。

剣術の腕前は非常に高い

「わかったわよ・・・」

「そうそう、それでいいのよ、舞」

「！、う、うるさい加奈子！」

加奈子

相馬忠夫の弟子で頭脳担当、
しかし性格に難あり。

禁止区域の住民としては最弱の部類で、
気配を消したり殺気を感じること等は出来ないが、
知恵を使つて上手く立ちまわる。

防衛のために自分に近づくと

不幸になるとの噂を広げ、

男に言い寄られないようにしたり、

それでも言い寄ってきた男を撃退したりしている。

「それで？朝霧は何で来たの？」

「ああ、五十嵐に用事があつてな」

「ふーん」

「舞、拗ねちゃ駄目」

「なんでそうなるのよ楓！！」

「くくくw」

「笑うな！！！！」

「ああ、すまない。じゃあ行くわ」

「何時でも着なさいよ・・・」

「あら、誘つてるの」

「加奈子！！こつちこい！！！！発殴つてやる」

「ほどほどにな・・・」

そして

「入るぞ」

俺はドアを開ける

「久しいな、海斗」

「俺もだよ、五十嵐」

五十嵐行雄

元政治家。

順調に行けば次期総理の可能性があったが、

7年前に政界を突如引退した。

禁止区域強制退去法を提案したのが

引退を決めた原因。

相馬と同じ特殊部隊に所属していたことがあるのでそれなりに強い。

「飲むか？」

「ああ」

グラスにウィスキーを注ぐ

「うまいな」

「ふっ、そうだな。海斗、IS学園はどうだ？」

「それなりに退屈はしないよ」

「そうか・・・今ではここは静かになったしな」

「そうさせた原因がどうか？ISを動かせた日、

お前は地下の住人を守るために、

俺に地上の住人すべてを殺させ、禁止区域強制退去法を

無理やり却下させたお前が」

そうこいつはあの日、ISが動かせたといったら

『地上の人間をすべて殺せ』

と言ってきた

禁止区域強制退去法をなくすために

「いいだろう？おかげで退屈してないんだからな」

「それもそうだ、・・・五十嵐」

「わかつている」

すると引き出しから何冊もの本が取り出された

「これだろ」

「ああ」

「わかつているな」

「わかつてるよ」

「もつていけ」

「！？いいのか！？この本は」

「構わん。入学祝いだ」

「五十嵐・・・」

この本は——世界の国家機密などを記した本だ
もちろんISのことも載っている

「ありがとう、・・・じゃあ行くぜ？」

「ああ、何時でも帰ってくるといい」

「助かる」

こうして俺は禁止区域から出て行つた

禁止区域 比佐深駅（後書き）

3～4日の間、里帰りで更新できません
5か6の夜まとめてします

誘拐

3日後 朝

「間に合ったか？」

俺は倉屋敷の本社のビルに向かっていた

（結構無茶言ったからな・・・）

間に合わんかもしれん

まあ、どうでもいいんだが・・・

「ん？」

アイツはあの時倉屋敷に来た

ピンク髪のチンチクリンの少女

すると黒い車が目の前に止まった

（迎えか？）

あの制服は憐桜学園の制服だからな

憐桜学園

資産家のお嬢様を育成すると共に

、将来的にそれを警護する『ボディガード』
の育成も同時に行うといった、

他とは一線を引いた体制を取っている。

入学条件は、女子は超一流の資産家、男子はボディーガード志望であること。学園内のあちこちに監視カメラが設置されている。その他、傍には警察の詰め所を始め、非常時のSPも十分に配置されており、犯罪者が手の出しにくい環境設備が揃っている。また訓練生年間30日以上理由なき欠席がある場合、進級出来ない規則がある厳しい学校である。

まあ・・・こんな感じである
その女子「お金持ち
迎えが来てもさほどおかしくない

だが・・・

「！！？」

行き成り出てきたかと思うといきなり少女を攫って行きやがった

（こんな真昼から誘拐かよ！？
クソ！！見知らずの他人なら見捨てるんだが・・・）

仮にも今世話になつてる人の娘の友達、
どうでもいいといえどもいいんだが・・・

（は~~~~~~~~行くか・・・。
少しの間チャリ借りるぜっ・・・）

俺はピックアップを出すと鍵穴に突っ込み
1秒で開け車を追いかけた

だが車と自転車どんどん差が開く

（ISがあればな・・・しょうがない、
多少の無茶はやむなしか・・・！）

自転車で脇を去っていく車の横ギリギリで走る

「・・・？」

運転手が間抜けそうにこつちを見た瞬間・・・
飛び移る！！

「ひ、ひいい！？」

借りる予定だけだった自転車は
コントロールを失い壁にぶつかり壊れた

（あゝあ、壊しちゃったよ。
まあいいか、それより・・・）

「そのまま前に走って、あの車を追え！！」

「な、何だお前はあ！？」

「ただの通りすがりだ！」

車のボンネットから指示を出す

「ば、馬鹿言うな！俺は止めるぞ！」

「今車を止めてみる、殺すぞ」

「ひい・・・！」

「とにかく今は前の車を追え。追って追って追いまくれ！」

「せめて理由をだな・・・！」

「死にたくないなら追う、最大の理由だろうが」

「そんな無茶苦茶な・・・」

「行け！！」

「ど・・・どうなつてもしらねーぞお！！」

その車は人気の無い道に行く

やがて・・・さらに人気の無い倉庫に着く

「つ、ついたぜ・・・あんちゃん・・・」

「中々のドラテクだったぜ、オッサン」

「これでも昔、峠でブイブイ言わしてたからな」

「でもさすがに・・・死ぬかと思った・・・」

ハンドルにもたれかかり、気を失う

俺はボンネットから飛び降りて

倉庫の中に入っていく

誘拐（後書き）

いよいよ誘拐されました
さあどうなる

倉庫 バトル

倉庫 中

明かり一つ差し込むことの無い
隠れるにはもってこいの場所

男達3人は少女を強引に引きずり出すとこだった
手には手錠、口にはガムテープでふさがれていた

「まさかこんな幸運が舞い降りるなんて、
思ってもいませんでしたねえ。」

隣桜学園、それもあの二階堂ですよ。

大金をせしめて、早くバラしちまいますか」

「そう慌てるな。まだ始まったばかりだろうが」

馬鹿だあいつら。俺が聞いてるとも知らず、呑気に会話してやがる
回り警戒しろよ、カス共が・・・

「ん・・・んっ！」

「怯えた瞳を見せるどころか、威嚇してるのかあ？
さすがは二階堂の娘だ。」

だが・・・その白い肌にタバコの火でも押し付ければ、
少しは恐怖に変わるだろうな」

ゆつくりとタバコの先端を近づける

赤い部分を押し付ければヤケドさせられるだろう

「・・・・・・・・」

「ほう・・・それでも恐怖しないか」

近づけたタバコを、すつと離す

「大切な商品だ、見えるところを傷つけるつもりはない・・・
内心は叫びたいほど、怖かっただろ？くっく」

いや、そうだろうか？

少女は見抜いてたのかもしれない
あいつらは最初から

タバコなんて押し付ける気はないと

「二階堂の電話番号は控えてあるな？」

「いつでもかけられます」

「・・・よし」

目線がそれた瞬間、

他でもない・・・少女は見逃さなかった

「ん、う・・・！」

両手、そして口を封じてるにも関わらず、
男を身体で突き飛ばし、駆け出した

（へえ・・・）

少し感心した。

お金持ちのお嬢様にそんな勇気があるなんてな

「つぁ・・・くそが！」

少女の思わぬ行動に感情が弾けたのか、
男は懷へと腕を伸ばす。

「ちい・・・!!」

なんであんな物もってんだよ！

このまま出たらすぐあの世行きだ

人間はあまりにも脆い生き物だから

助かったのはこっちに少女が逃げてきたことだ

だから脇を駆けようとする女子の身体を、

思いっきり俺のほうに引き込んだ

「!？」

バンツ!!!

危ね〜、ギリギリセーフ

頭スレスレの位置を、銃弾がかすめた

「なんてことを!? 死んだら意味ないんですぜ！」

「く・・・そうだったな・・・！」

しかし、ねずみが1匹迷いこんでるらしい」

「・・・ん、んっ！」

「60点だな」

口に貼られたガムテープを剥がす

「逃げるなら相手の持ち物も見通すべきだな」

「あ、あんたは!!」

「また会ったな」

「どうしてここに？」

「通りすがりの一般人だ」

「通りすがりの一般人はこんなことしない」

「とにかく、俺のことはいいから逃げろ」

「そうね・・・と言いたところだけど、

この両手じゃ満足に走れないわ」

すつと両腕を持ち上げる

おれはピッキングツールをだすと手錠に近づける

「なに、それ？」

「ピッキングツールだ」

「あんた馬鹿？そんなもので簡単に開くなら苦労しないっ」

ガチャ

「よし、走る準備しろ」

「嘘、1秒もかかってない・・・」

「そこにいるのは誰だ？」

お嬢ちゃんの他にもいるだろうっ？」

「いませんよ～～」

「「「いるだろ！！！」」」」

・・・3人だけっばいな・・・

「俺達がおとなしいうちに出てこないと、

気づいた時には死体になってたってこともありうるぜ？」

「どうする気？」

あんたがいくら強くても拳銃に男3人、絶望的よ」

「そうか？」

「そうよ」

「まさか勝手に助けといてここから先は考えてなかったとか言う気？」

「あ、あんた、こんなときになんで目なんか閉じてんの？」

「・・・・・・・・」

足音が少しずつ近づいてくる

この距離からすれば、10メートルほどか・・・

「まさか、死んだふりしよーて魂胆じゃ・・・！」

邪魔なノイズを省く

そして足音に集中しろ

9・・・8・・・7・・・

2手に別れた

足音が2手から近づいてくる

動く足音が4つだから7メートルで拳銃を持ったやつがいるはず

6・・・5・・・

「くっ！？どうすんのよ！！」

「奴らの意識が俺に流れたら

迷わず倉庫の外に走れ。車が止まってる」

「え？」

迷うことなく、体を左側へ投げ出した

「ちょ・・・・・・・・！？」

「え・・・・・・・・？」

目の前の男にラリアットをかけ地面に叩きつけると

顔を踏みつけ意識を奪い取る

「あぐ！」

「なにい！？」

「なんだあいつは！」

これで注意は少女から俺へと向けられる

「っ！」

それをうかがった少女が、

一目散に倉庫の入り口へと駆けた。

「ひゅうつ・・・」

普通は身体がこわばって動けないもんだが・・・

「ちっ・・・！？」

「餓鬼を取り押さえます、

あの女をお願いします！」

「無駄だな」

「な——」

ブン

突き出された、腰すら入っていない、
単純な攻撃をかわす

「こんなもんは、喧嘩の拳とも呼べないぜ」

もつとも、仮に男のパンチ力がプロボクサー級の威力と速度を兼ね備えていたとしても、俺にすれば何一つかわらない
一流と呼ばれるボクサーや柔道家程度など、
あの場所に放り出されたら、一日で死に絶える
その程度のもの

バコン！！

カウンターで叩き込んだアッパーで、
男の体は面白いように浮き上がり、吹き飛んだ

「ちゅ、宙にまった！？バカな——！」

俺を啞然と見つめるだけで満足に引き金を引けないようだ

「おまえら、犯罪者には向いてねえな」

高圧な態度と行動で相手の動きを抑止する
衝動的に身体が硬直する相手を見て、
思わず笑みがこぼれた

「これじゃ、どっちが悪党かわかんねえよな」

俺の身体は久々に興奮してきている

「ヒィ……！ なっ なんだおまえはあつ！」

1歩前に出ると、男は1歩後退した

「銃口が震えてるぜ？」

人、撃ったことないのか？

世の中には、そんなもんじゃビビッてくれない人間
だっていることを、覚えておいた方がいいな」

「黙れっ！殺すぞ！」

「引けるのか？」

俺の中に存在する悪の本質が、
相手のちっばけな悪を
呑み込みたがっている

「テメエにその引き金が」

「くそ、舐めるなあ！！」

「遅え——」

古武術の活歩と抜き足を合わせて応用した技
「無秒瞬動」（オリジナル）

相手の意識にしていない所を
活歩ですごい速度で移動し
目の前から瞬間移動したかの様に見せる技
ちなみにかなり早く、瞬歩と大差ないです

それで相手の後ろを取る

「な、きえたあ！？」

「後ろだ」

「な！——」

ゴキ！

顎を打ち抜く

「ガハッ!!」

全力で殴るまでもなく、男はその場に崩れ落ちた

「やれやれ」

倒れた3人を見て、軽く息をつく

最後の1人は鳴ってはならない音がしたが・・・

「1件落着、か？」

とりあえず死人はいない・・・はず

体を見ると長い間使ってなかったであろう

倉庫で暴れたせいか、埃をかぶってしまった

それらをパツと手で払い、倒れた男に手を伸ばした

念のためにやっておくことがある

倉庫 バトル（後書き）

海斗の移動方法強すぎたかな？
まあ責任はとりたくない

ボディーガード

倉庫 外

外に出ると少女が待っていた

「あいつらは？」

「倉庫の中で、ぐっすり眠ってるだろうぜ」

「まあ・・・侑祈を倒したから

当然といえば当然なのかしら・・・」

「で、その手にあるのは？」

「弾薬」

ハンカチに包んで持ってきたソレを、
海の中に放り投げる

「なにしてるの」

「万一直って来た時のためだ」

弾倉から抜き取ったすべての弾だ

「拳銃ごと捨てればよかったんじゃない？」

「逮捕された時の決定打にならないだろ？」

「・・・」

「ほら」

持ってきたものを投げる

「私のかばん・・・」

「私物が何も盗られてないから確認して、それから警察に電話しろ」

「ええ・・・そうね」

俺はその間に眠ってるオッサンを起こす

「オッサン、起きてくれ」

「ん・・・？」

「悪いが、もう少し乗せていってもらっぜ」

曉東市 商店街

「このあたりでいいかい？」

「どうだ」

「・・・悪いけどそこを左折して」

「左折？左折って、この先は・・・」

「大丈夫、私がいれば通れるから」

「？、どうした？」

「どうしたってあんちゃん、ここから先は指定警護区域だぜ！？」

「マジか・・・」

指定警護区域

上流階級の人間が住まう高級地。

許可のない人間は検問で止められ、通行することができない

「いいのか？」

「ええ」

指定警護区域内

「こ、ここか？」

「そう・・・ご苦労だったわね」

「いや・・・き、気にしないでいいさ、はは・・・」
「・・・・・・・・」

男が困惑するのも無理はない
実際俺も困惑している

——これだけドデカイ屋敷を目の辺りにしたらな——

「あんたもここで降りて」

「なに？」

「助けてもらったお礼がまだだし」

「いらねーよ」

「いいから降りなさい」

「・・・・・・・・わかった」

ここで騒がれるとまずい
とりあえず言う事聞いておこう

「じゃあなあんちゃん。頑張れよ」

「・・・助かった」

「おうよ」

二カッと笑って、おっさんは
車を走らせて行った

「マジで礼とかいらんぞ」

「・・・」

「何見てる」

「よし」

「なにが？」

携帯を扱い誰かに電話していた
電話が終わると

「名前は？」

「・・・朝霧海斗だ」

「決めたわ」

「だからいったい何なんだ・・・」

「あんたは今日から——私のボディガードよ」

少女は涼しげな表情で、そう言ったのだ

「」

「なによ？」

「さーて、そろそろ行くかー」

バシ！

「・・・頭を叩くな」

小さいくせにすごいジャンプと力で
しばかれた

「あんたがアホ丸出しにするからよ

とにかく、あんたは私のボディガードよ、わかった?」

「そうかお前のボディガードか」

「その通り」

「さよなら」

「踵を返すな」

「なんでボディガードなんてしないといけないんだよ」

「私の心情を打ち砕いたからよ」

「は?」

「言い訳がましいけど

私1人でもあの時逃げれた」

「無理だった」

「なぜ?」

「俺が居ないと頭打たれて死んでたからだ」

「・・・」

「は~~~~~帰るぜ」

「やっと着たわね」

「は?」

すると周りに黒服が集まり始めた

「何のまねだ?」

「あなたを捕まえる」

「・・・」

「さすがに100人の相手は無理でしょ」

「お嬢さま、この方ですか」

「ええ、そうよ佐竹」

「・・・」

「なあ!?!」

「どうしたの、佐竹?」

俺は連絡先を教え出て行った

ボディーガード（後書き）

何で1日だけ学校に行かないと行けないんだろ・・・

クラス代表決定戦

放課後 アリーナ

「遅かったですわね」

「待たせたのそっちのせいだろ・・・」

「うるさいですわよ！！—夏さんに悪いとこ見せれませんから本気でいきますわよ」

「・・・」

「それでは試合開始！」

織斑先生の号令でブザーが鳴る

「行け！！ブルー・ティアーズ！！」

ビットがこちらに向かってくる

「——さあ、踊りなさい朝霧海斗！ わたくし、

セシリア オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！！」

「きめ台詞？」

「うるさいですわよ！！」

まあビットはこんなことしてる間もきてるわけで
海斗は空に飛ぶが・・・
レーザーが直撃した

A.ビット

side 一夏

「何してるんだ、アイツは!？」

海斗はボコボコにされていた

「げ!! まずいぞ!!」

シールドエネルギーが100切ってるよ
このままじゃ海斗は負けるかも

「頑張れ海斗!!」

「織斑先生? どうしたんですか?」

千冬姉がマイクに向かう

(うわ、あの顔は!!)

滅茶苦茶怒ってる

セシリア、少し加減しろ!
殺されるぞ!?

そして・・・

side out

(あと少しか・・・)

俺は今回わざと負けるつもりだ

クラス代表なんてとんでもない
というかめんどくさい

あと50

これでセシリアがクラス代表
セシリアがライフルを構える
これで・・・

『朝霧！！！！！！』

「は？」

「え！？」

織斑先生がいきなり声をあげた

『何をしている！！わざと負けたりしたらお前を代表にするぞ！！』

「な！？、ふざけんな！こんなカス野郎に

わざと負けるなんて屈辱的なこと我慢してんのに、

わざと負ける理由を踏みにじるな！！」

「あ、あなた手加減してましたの！？」

「・・・・・・・・」

やべ・・・

『ここから勝てば代表にしない、いいな？』

「・・・は~~~~どうなっても責任はとらねえ、いいな？」

『ふっ』

「・・・ということだオルコット

お前には眠ってもらっぜ！！」

「無秒瞬動 瞬時加速付き」

放出直前のエネルギーを一度圧縮、爆発的加速力に変える
近接主体ISの高等技術の一つ、瞬時加速。
その技術が無秒瞬動に組み込んだものである

「！？どこに行きましたの！？」

「後ろだ」

「え！？」

いきなりロックからはずれ後ろ取られたのに
セシリアは驚きを隠せなかった
海斗はその隙を逃さずに技をはなつ

「五連拳弾」

自分の狙った場所に高速、しかも連続で打ち込む

それを背中に叩き込み下へ叩き落とす

そこへ無秒瞬動で先に回りこみ

「螺旋抜き手」

強い回転を加えた抜き手

ちなみに抜き手とは

空手などの格闘技、武道で使用される殴打技の一種である
貫き手または貫手突きとも呼ばれる

まあ、こんな感じ？

とりあえず吹っ飛ばす
遮断シールドにぶつかる
無秒瞬動で近づき

「かはあ!？」

「とりあえず痛いから覚悟しろ」
「!？」

「十連拳弾」

ドガガガガガアーン!!!

『試合終了——勝者、朝霧海斗』

Aピット

side 織斑一夏

「「「——」」」

俺、箒、山田先生は何も言えず絶句していた
いやいやいやいや、だつてさ!？
なんであんな強い!？
代表候補生を圧倒!？

「・・・さすがあの男の息子というべきか・・・」
「千冬姉、あのお（バシン!）織斑先生・・・」
「なんだ？」

「・・・なんでもない」
「そうか」

s i d e o u t

「おかえり海斗」

一夏が労いの言葉をかけてきた

「ああ・・・で織斑先生、

俺はクラス代表をしなくていいんだよな？」

「わかつている」

「・・・帰るぞ、寝たいからな」

「ああ、お疲れ」

俺はピットを出る

その後俺は暁を倉屋敷に送り寝た

クラス代表決定戦（後書き）

明日から里帰りで更新できません
帰って来てからまとめて更新したいと思います

ランク（前書き）

久しぶり？です

今帰って来ました

だから更新したいと思います

あとこれから中間試験になります

2日に一回程度になるかもしれません

宜しくお願いします

ランク

次の日

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉々と喋っている

「先生！俺は4日前の試合負けたんですが、なんでクラス代表になっているんですか！？」

「それは・・・それはわたくしが辞退したからですわ！」

山田先生の言葉を遮りセシリアが一夏の疑問に答えていた。

「セシリア。なんでクラス代表を辞退したんだ？

俺がクラス代表になるのを嫌がってたのに」

「朝霧さんの試合は悔しいですけど完敗でしたし、

一夏さんの試合も最後の一撃が決まっていたら負けていたのは本当はわたくしのはずです、

わたくしの勝ちであるのは代表候補生としての

プライドが許せないだけですわ

それに、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。

やはりIS操縦には実戦がなよりの糧、

クラス代表になれば戦いには事欠きませんもの」

クラスの人々も

「いやあゝ、セシリアわかってるうゝ」

「そうだよな、せっかく世界で二人の男の
操縦者のうちの一人なんだし持ち上げないとね！」

「私達は貴重な経験が積める。」

他のクラスには情報が売れる。一粒で二度おいしいね織斑君は」

俺達はCMか？

「そ、それですわね。わたくしのような人間が

IS操縦を教えて差し上げれば、それはそれはみるみる上達を」

バンツ！！！！

机を叩く音がする、それと同時に立ち上がったのは箒

「その必要はない、一夏には私が教えることになっている」

「あらあなたはランクCの篠ノ乃さん、

ランクAのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ！」

「へえ、箒ってランクCだったのか。ちなみに俺はBだぜ」

「だからランクは関係ないと言っている！」

「ランク何てどうでもいいだろ・・・」

「そういう海斗はどうなんだよ」

うわあ。クラスの奴ら、興味深々だよ・・・
しかしな・・・

「・・・」

「海斗？」

「Sだ」

「…………え?」

「朝霧のランクだ」

「織斑先生!!」

いきなり答えた織斑先生を睨む

「構わないだろ朝霧、どうせこの前の試合で適性率は出ている」

「……………」

「……………」

すると

「…………え…………!!」

「座れ馬鹿ども。お前達のランクなど朝霧以外ゴミだ。

私からしたらどれも平等にひよつこだ、

まだ殻も破れていない段階で優越をつけようとするな。

それと代表候補生でも一から勉強してもらつと前にいったろ。

くだらん揉め事は十代の特権だが、

あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

千冬姉さんに言われては言い返せないの、

オルコットも何か言いたげな顔をしているが口が開くことはなかった。

「クラス代表は織斑一夏。異論はないな」

「…………は、はい!」

女子の声が響く

飛行操縦

グラウンド

「それではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、朝霧。試しに飛んでみる」

「俺はISを倉屋敷に預けてる」

「そうか、では織斑、オルコット、行け」

「はい」

セシリアはすぐに展開する
しかし一夏は・・・

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

まだだった・・・お、終わった

「遅いぞ、もっと早くしろ」

「・・・・・・・・」

ヒデエ・・・

「飛べ」

「お先に」

「待てよセシリア！」

二人が飛ぶ

・・・一夏遅

「何をしている。スペック上の出力は白式の方がブルー・ティアーズよりも上だぞ」

しばらく見てると箒が山田先生からインカムを取り上げる

「何してんだ、箒？」

「黙っている」

す~~~~~

『一夏っ！いつまでそんなところにいる！さっさと降りて来い！！』

キーーーーーン

「うるせえぞ！お前何やってんだ！！」

「そうだ、馬鹿者」

バチーン！

でた、必殺の出席簿アタック！！

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやってみせろ。

目標は地上10センチだ」

「了解です、では一夏さん、お先に」

急降下するセシリア、

そしてなんなく停止した

「次、織斑、行け」

「はい」

急降下する一夏、

あれ、早すぎね・・・

「うわあああああ、どいてくれええええええええええ！！！」

「何してんだ!？」

間に合え！！

「空波 拡散」

空気を飛ばす技

倉屋敷に居た空気を飛ばした

奴が使った技の強化版

それにより一夏のISの勢いが消える

ド
ン

「たつ、助かつた」

┐
┐
┐
┐
┐
┐
•
•
•
•
•
•
┐
┐
┐
┐
┐
┐

まあ、一夏よりも俺が何したかの方が気になるわな……

「何したの！？朝霧君！？」

「超能力!？」

「今の教えて!!」

「静まれ、馬鹿共」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「よし、織斑、オルコット。武装を展開しろ。それぐらい自在にできるようになっただろう」

「「は、はい!!」」

一夏が数歩横にずれる。

右手を前にもつてきて左手で握る。

少しして光が放出される、そのまま光は集まり形を成していく。
光が収まると一夏の手には雪片式型が握られていた。

「遅い、0.5秒で展開しろ。次、オルコット、やってみろ」
「はい」

セシリアはすぐ展開する

「さすがだな、代表候補生。
だがそのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ
気だ。」

正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしがイメージをまとめるのに必要な
「直せ、いいな」・・・はい」

ヒデエ・・・

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「え、は、はい」

？中々でない。どうしたんだ？

「くっ・・・」

「まだか？」

「す、すぐに・・・ああ、もうっインターセプト!!」

武装の名前をヤケクソ気味に叫ぶ、
それによってイメージが固まり武装が展開される。
しかしこの方法、教科書の頭の方に書かれている
いわゆる初心者用の展開の仕方だったはずだ。
それを使わないと武装を展開できなかったのは
代表候補生として屈辱的だろうな。

「くくくwww」

「笑わないでください!!」

「わはははは!!!」

「な、なら、あなたは出来ますの!?!」

「俺のISは武器ないんだぜ」

「くっ」

「・・・何秒掛かっている。

実戦でも相手に待ってもらうつもりか」

「じ、実戦では間合いに入らせません!
ですから問題ありません!」

「素人の一夏に入られ、素人の俺に
ボコ殴りにされた奴が言うかねー」

「あなたはどっちの味方ですの!?!」

「状況が有利な方の味方」

「・・・」

「よし、片付けろ、終わりだ」

「」「」「はい」「」「」

転校生

放課後

side 一夏

「というわけで、織斑君クラス代表決定おめでと〜」
「おめでと〜」

パンパンとクラッカーが鳴る。

時刻は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂。
一組メンバーが全員揃っていた。各自飲み物を片手にわいわい騒いでいた

「それじゃ、織斑君の代表決定と、
代表選の健闘を願いまして〜!!」

「〜」
「かぁんぱぁ〜〜いっ!」
「」
「」

「乾杯?」

「・・・随分とモテモテだな、一夏?」

「何か言ったか?」

「——何でもない」

箸はプイッとそつぱを向いてしまった。

お菓子を食べつつ、首を傾げる

何かしたか?

「はいは〜い!! 新聞部副部長二年、薫子見で〜す!

噂の新生、織斑一夏君と朝霧海斗君にインタビューしてきました

！
」

「うわぁ！？」

行き成り現れた！？何だこの人

「でわ、意気込みを、どうぞー！」

「まあ、なんというか、頑張ります」

「えゝ。もっと良いコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

あゝ、もあゝゝゝなんかもつと言ってよ
これじゃ、捏造できないじゃない！！」

「しないでください・・・」

「もおいしい！朝霧君は？」

「いませんよ、寝るそうです」

「そんなゝゝゝゝ、く、こうなったらセシリアさん！！」

「はい、ではまず、何故私がクラス代表を辞退したかと言つと」

「長そつだからいいや、写真だけ頂戴」

「！？あなたねえって・・・写真？」

「写真」

「もしかして私と一夏さんの二人ですか？」

「YES」

「あ、あとで、その写真は頂けますかしら！？」

「いいよ、じゃあ握手してゝ」

「おう」

「はい」

「じゃあ1+1は？」

「「「「「2！！」「」「」「」

パシャ！

うお！？全員入ってる！？

「何で皆さんが入ってきますのーーーーーっ！！」

「まあまあ、ある種のお約束なわけで」

「セシリアばかり織斑君と仲良くするのはズルイし」

「チャンスは平等に、だよな？」

「ね？」

「きいいいいいい！！！！」

こうして夜が更けていく

side out

IS学園 入り口

「ここがIS学園ね～」

一人の少女がきた

「アイツ元気にしてるかな」

次の日

「ねえねえ、織斑君、朝霧君、もう2組の転校生のこと聞いた？」

「転校生？」

「……………」

ここの途中編入はすごく難しい
すなわち、すごく能力の高い人物になる

「んー、何でもその娘、代表候補生なんだって。中国の」
「あら、今頃になって私の危ぶんでの事かしら？」
「んなわけないだろ、馬鹿・・・どうせ俺や一夏のせいだな・・・」
「馬鹿ではないです!!」
「代表候補生ね・・・どんなのだろうか・・・」
「・・・気になるのか？」
「ん？ああ、少しはな」
「ふん・・・」

機嫌をそこねた

一夏、少しは気を使え
俺？俺はわざとだ
しかし

「中国の代表候補生。名前は確か・・・」
「いいよ、別に思い出さなくても」
「おう」

「しかし今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？
来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そうですね。わたくしに勝った以上、勝ち上がってもらわない
と困りますわ

今日から対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう」

「織斑くん、頑張ってね」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ」

「そうだろうな・・・ところでドアの裏に5分くらい居て楽しいか？
いい加減出てこいよ、裏に隠れている奴」

「「「「え？」「」「」」」

みんなドアに注目すると・・・ドアが開き

「何で気付いたのよ！？というか言わないでよ！？」

せつかくタイミング計つてたのに台無しじゃない！！」

「鈴・・・？お前、鈴か！？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。

今日は宣戦布告に来たってわけ」

自信満々に言つと

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなつ・・・！？なんて事言うのよ、アンタは！

言つとくけどね！私は2組のクラス代表になつたんだから！！

すなわち・・・」

「よしみんな席に着け、急げ」

「っ「はい」」

「無視するな！！ていうかなんで無駄に

統率力取れてるの？」

「教えてやるよ、凰鈴音。この号令・・・」

バシーン！！

「織斑先生が来るだ」

「先に言いなさい！！」

バシーン！！！！

「予鈴はなつたぞ。さつさと教室に戻れ。授業の邪魔だ」

「く・・・ま、また後で来るからね、逃げないでよ一夏！！」

食堂

昼休み

「「お前（あなた）のせいだ（ですわ）！！」」
「何で・・・？」

箒とセシリアは授業に全く集中しておらず、
昼までに山田先生から注意五回、
織斑先生に三回叩かれたのであった。

「なあ飯くいに行こうぜ、愚痴るのはその時にしろ」
「むう・・・わかった」

「了解ですわ」
「俺のせい？」

そろそろと移動を開始する

食堂に着くと一夏は日替わりランチ、
箒はうどん、セシリアはランチ、

俺はカレーうどんを選んで食券を買う。

受け取り口に行く途中、通せんぼする人物がいた。

「待ってたわよ、一夏！」

「邪魔だ・・・」

「そうだぞ。とりあえずそこを退いてくれ。
学食取らせないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね！分かってるわよ！！」

「麵のびるぞ」

「わ、分かってるわよ！大体、

アンタを待つてたんでしようが！

なんで早く来ないのよ！」

「あそこ席空いてるからそこで話そうぜ」

「おお、わかった」

という訳で席に着く

すると一夏から切り出した

「それにしても久しぶりだな。

ちようど丸１年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。

たまには怪我病気しなさいよ」

「いや、その希望はどうかと思うよ？」

「ごちゃごちゃうるさいわね！

あんたなんか怪我すればいいのよ」

おゝい、気が動転してすごいこと言ってるぞ

一夏が可哀想だろ、見るこの

俺、何か悪い事でもしたか？って顔を！！

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？

おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタ達こそ、なにIS使ってるのよ。
ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

バン！

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだから？」

「そうですわ！一夏さん、この方とはどういう関係で！？」

まさかこちらの方と付き合ってたっしやるのっ！？」

疎外感を感じた2人はついに机をたたきながら問い詰めている。
聞き耳を立てている他のメンバーも
興味津々とはかりに首を縦に大きく振る。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・」

「そうだぞ、ただの幼馴染みだ・・・鈴、どうかしたか？」

「何でも無いわよ」

フン！とそっぽを向く鈴、

しかし朴念仁には理由なんて解る訳ない。

「幼馴染み？」

「ああ、そうか！！箒が転校した後、

入れ替わりに転入して来たのが鈴なんだ。

いうなればそう、箒はファースト幼馴染で、

鈴はセカンド幼馴染ってところか？」

「あんたが箒なのか、よろしくね」

「ああ、こちらこそ」

「んん！ちよつと私のことを忘れないでください。

セリシア・オルコット。イギリス代表候補生にして・・・」

「あ、ゴメン。私他の国興味ないから」

「何ですって！！」

うわぁ、この流れ下手したら泥沼になる！？

「一夏、俺食ったから先行くわ」

「おお、行つてら」

「じゃあ」

俺は急いで外に出る

食堂（後書き）

やばい！6・7巻読んだら楯無さんめっちゃ気に入った、
ヒロインでしょう・・・

生きている？

放課後

俺は比佐深駅に来ていた

「五十嵐」

「海斗か、どうした？」

「この前の誘拐犯、どうなった？」

「ん？あの輩達は捕まったが」

「で、黒幕は？」

「まだだ、・・・お前はそんな事を言いに来たのか？」

「・・・は~~~~、お前にはばれるか」

「肉体面ではお前の圧勝だが、精神面では私の圧勝だからな」

「・・・なら、率直に言う。

五十嵐、国会議員に戻ってくれないか？」

「理由は？」

「政府の連中が信用できない、何かあった時に政府の情報があるかもしれないだから・・・」

「わかった」

「！？、いいのか！？」

「お前からの頼みだ、

それに此処を守るのにも役に立つ

一石二鳥だ」

「ありがとう」

「構わんさ、そういえば
相馬が呼んでたぞ」

「相馬が？」

「ああ、次にきたときに来いと伝えてほしいと」
「わかった」

相馬の部屋

「来たか」

「何だ？」

「聞かせてほしい、雅樹は死んだのか？」

「・・・どうしたんだ？急に？」

「・・・雅樹が生きているかもしれない」

「!？」

「この前町を歩いていたら雅樹らしき人物を見かけた
2人の女を連れてな・・・」

「——見間違いじゃねえのか？」

「わからん、だが連れていた奴のうち

1人はMと名乗っていた」

「・・・そうか、見間違いだぜ

だって親父は俺の目の前で殺されたからな」

「わかった、見間違えたのかもな

すまなかったな」

「いいよ、別に」

（見間違いだろ）

そう思いながら

俺は帰路に着く

寮

パーン

何だ？

鈴が走って一夏の部屋を出て行った
何した一夏・・・

翌日

生徒玄関前廊下に一枚の紙が張り出されていた。
それはクラス対抗戦^{リーグマッチ}の組み合わせ表であった。
そして、一回戦の組み合わせ。

【一組代表 織斑一夏 対 二組代表 鳳鈴音】

幼馴染同士の対決だった

生きている？（後書き）

だいぶ書置きが無くなってきました
本格的にやばいかも

クラス対抗戦当日（前書き）

生きている？が短かったので
少し早めに更新します

クラス対抗戦当日

クラス対抗戦当日、第2アリーナ

side一夏

「今謝るなら、少し痛め付けるレベルを下げてもいいよ」

「要らねえよ、全力で来い」

「一応言っておくけど、絶対防御も完璧じゃないのよ。」

シールドを突破する攻撃力があれば

殺さない程度にいたぶる事は可能なのよ」

「なんだ、それは俺に対して殺さない程度に

いたぶれるとでも言いたいのか？」

「そうよ！」

『それでは両者、試合を開始してください』

開始を意味するブザー音が鳴り二人して突進する

ガキン！！

互いの接近武器で初撃を放ったが正面からのぶつかるが

一夏は競り負け吹き飛ばすがセシリアに習った

三次元躍動旋回で体制を建て直す

「ふーん、初撃を防ぐなんてやるじゃない」

「どうも！」

雪片式型で斬ろうとすると衝撃が一夏の左肩を襲った

「ぐ！？」

なんなんだ！？、いま左肩に衝撃が・・・
砲弾なんて撃ってない、ならなんだ！？

「今のはジャブだから」

「ストレートが来る」

「——ッ！？」

俺は咄嗟に逃げようとしたが
その瞬間、一夏を凄まじい衝撃が襲った。

「な、何だ今のは！？」

箒はモニターに映る光景に叫んでいた。

鈴の非固定浮遊部位が展開し、
中心の球体ユニットが光ったと思った瞬間、
一夏が地面に叩きつけられていた。

「あれは衝撃砲ですね。空間に圧力を掛けて砲身を生成、
余剰で生じるエネルギーを弾丸にしてぶつける武器です」

「ブルー・ティアーズと同じ、第三世代型兵器ですわね・・・」

攻撃を分析した真耶の説明に、セシリアが続ける。
モニターの向こうではなんとか立ち上がった一夏が、

連射される衝撃砲の弾雨を転がりながら躲していた。

「——しかもあの武装は、射角がほぼ無制限で撃てるようです」

「つまり……」 死角が存在しない」？」

「そういう事ですね……」

「さらに二つ交互に使うことで擬似連射状態になってるな」

「っ……」

「クソッ……！」

「よく躲すじゃない。」

この龍砲は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

「ハイパーセンサーがなかったら終わってるぜ……」

（でもこのままじゃジリ貧だ

こうなったら千冬姉に教えてもらった……）

瞬時加速

（いくぜ……）

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……そんな事、当たり前じゃない……」

とっ、とにかくっ、格の違いってモノを見せてやるわよ！」

（えっと……）

一夏は昨日の親友の言葉を思い出していた

『一夏、俺は明日倉屋敷に用があつて試合を見れない』

『そんなぁ!?!』

『だから応援しているぞ。』

そうだな、少しいいテクニクを教えてやるよ。

お前は零落白夜というチートみたいな能力がある。

だが相手はそれを警戒するはずだ。

だから雪片式型を相手に向けて投げろ。

そしたら相手は嫌でもお前から

雪片式型に意識を向けなければならない。

そして瞬時加速を使い雪片式型を取るついでに

相手の裏めがけていけ。そしたら多分反応できない。

ちなみにこれ使ったら二度ときかないからな、

気を付けろよ』

(よし!)

一夏は鈴に向けて雪片式型を投げる

「「「「「!?!?」」」」」

アリーナの人全員驚く

もちろん鈴も

「何してんの、一夏!?!」

もちろん鈴は避けようと雪片式型に意識を向ける

(今だ!?!)

俺は瞬時加速を使い雪片式型を取り鈴の後ろをとる

「!？」

「終わりだ!!」

ズドオオオオオオオオオオオオオオ!!

謎の衝撃がアリーナ全体を揺さぶった。

s i d e o u t

Aピット

「何？何がありましたの？」

「一夏！」

「システム破損！何かがアリーナの遮断シールドを貫通して来たみたいです！」

「試合中止！織斑、凰、直ちに退避しろ！」

謎のIS

Side一夏

「何だ？何が起きた？」

イマイチ状況が理解出来ない一夏に鈴から通信が入った。

「一夏、試合は中止よ！直ぐピットに戻って！」

「何！？……ん？」

鈴からの通信の後、モニターに警告の文字が表示される。

『警告、ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています』

一夏がモニターからステージ中央の方に眼を移すと、黒い影と怪しい光が爆煙越しに見える。

「一夏、早くピットに！」

「鈴はどうするんだ？」

「私が時間を稼ぐから、アンタは先に逃げなさい」

「逃げるって、女を置いてそんなこと出来るか！！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」

「でも！！」

「別にあたしも最後までやり合うつもりはないわよ。

こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやって来て事態を収拾――」

「っ！？鈴、避ける！」

「え？…きゃっ！？」

間一髪、狙われた鈴を抱えて敵のビームをかわす事に成功した。センサーによって割り出された熱量の値を見て背筋に冷たいモノが流れる。

「セシリアのとは比べ物にならないぞ！？」

「ちょ、ちよつと馬鹿！放しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな！つて馬鹿！殴るなよ！！」

「うっ、う、うるさくっい！！！！て言つかさつきからドコ触って

――」

「！来るぞ！！」

爆煙から現れたのは、正に異形。全身を装甲で覆い、その四肢から更に延長して装甲を身に着けている。

「何だよアレ・・・」

信じがたい光景に目を疑いながらも情報を得る為、侵入者たる全身装甲にオープンチャンネルで呼びかける一夏。

「お前、何者だ？何が目的だ、答えろ！」

沈黙、何も答えない相手に一夏も苛立ちを隠せない。

『織斑君、鳳さん！直ちにアリーナから脱出して下さい。直ぐに先生達がISで制圧に行きます』

今度は一夏達に真耶からオープンチャンネルで通信が入る。

「いや、皆が逃げるまで俺が喰い止めます」

『それはそうですけど・・・でも、いけません！織斑君！』

『一夏さん！』

『一夏！』

教師として生徒を危険な目に会わせる訳にはいかない真耶と

一夏を心配する箒とセシリア。一方の千冬は静かに見つめている。

「それに俺は引いちゃいけない・・・」

『なぜだ！？』

箒が声を荒げて言う

「アイツは俺をロックしている。多分俺が引けば

ここにいる人を攻撃すると思う。

だから俺が戦えば安全だけど

引いたりしたら・・・」

『人質を殺す、か、織斑』

「多分」

『『『『——』『』『』』』

みんな絶句していた

「救援よりも、アリーナの皆の避難を優先して下さい、頼みます！

！」

そして、一夏は通信を切った。

「……………て事だ。良いな、鈴？」

「なによ、カッコつけちゃって・・・ていうか、

いい加減に下ろしなさいって！ 動けないじゃないの！！」

「ああ、悪い」

手を離す

「…残りエネルギーも少ない。

こんな状況じゃ勝つのは難しいわね」

「難しいっただけで確率はゼロじゃないんだろ？
それならやってやるさ」

「どうすんの？」

「逃げたけりゃ逃げてもいいぜ」

「なっ！？馬鹿にしないでくれる！？あたしはこれでも代表候補生
よ。

それが尻尾を巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ！」

「そうか、じゃあ鈴！いくぞー！」

「うんっ！ー！」

俺と鈴はそのまま侵入してきたISに向かって突っ込んでいった。

Aピット

「もしもし！？ 織斑君、聞こえてますか！？

織斑くん！！ 凰さん！！」

ピットでISのプライベート・チャンネルで
山田先生が一夏と鈴音に呼びかけている。

「少し落ち着いたらどうです山田先生」

「これが落ち着いていられますか織斑先生!？」

織斑君と凰さんは自分達が食い止めるって言ってるんですよ!！」

「別にいいんじゃないか？ 本人達がやると言ってることだし」

織斑先生はコーヒーに白い粉を入れていた。物腰も落ち着いている。

「取り敢ずコーヒーでも飲め。」

あなたに必要なのは落ち着くよりも先ず糖分だ」

「・・・織斑先生。それ塩です・・・」

「「「「・・・」」」」

ピタリと千冬の手が止まる。

「・・・・・・何で塩がここに？」

「さ、さあ・・・でも、

ハッキリと塩って書いてますし・・・」

ピットに何とも言えない空気が流れる。

「あつ！ 口では何と言ってもやっぱり弟さんが心配なんですネ。
だからそんなミスを——」

「・・・・・・」

そして今度は嫌な空気が流れる。

「山田先生、どうぞ」

「え、嫌でもそれ、

塩が入ったやつでは・・・
しかも大量に・・・」
「どうぞ飲んでください」

山田先生はすすずつと出されたコーヒーを涙目で受け取った。

「うう・・・いただきます」
「一気でどうぞ」

悪魔、否魔王がいた

「先生、私にISの使用許可をっ！
すぐにでも出撃できますわっ！！」

「それは無理だな」

「どうしてですのっ！？ このままじゃ、一夏さんがっ！」

「これを見る。アリーナの遮断シールドはレベル4。
全扉はロックされている状態だ。

これで、どうやって避難や救援を行う？」

「そ、そんな・・・っ！でしたら、

緊急事態として、政府に救援をっ！！」

「すでにしている。そして今、

三年の精鋭がシステムクラックを実行中だが、
すぐには終わらない」

「で、では一夏さん達は・・・っ！」

「しばらくはあいつらだけで戦うことになるな」

「そんな・・・」

「どっちにしろ、お前では足手まといだ。突入部隊には入れん」

「な・・・っ！？ 私が足手まとい・・・っ！？」

「ブルー・ティアーズの装備は1対複数向きだ。

お前が複数の側に入れば、要らぬ混乱を呼ぶ」

「そ、そんな事は・・・っ！」

「——では、連携訓練はしたか？ その時の役割は？
ビットの使用タイミングは？ 味方の構成は？ フォーメーション
は？」

敵のレベルはどれ位を総て思惟している？ 連続稼働時間は？

味方機の——」

「も、もう結構ですっ！！

充分に分かりましたわっ！・・・・はうっ」

「ふん、分かれば良い」

「朝霧君！今どこに居ますか！？」

山田先生は海斗と連絡を取っていた
そしていつのまにか筭が居なくなっていることは
誰も気が付かなかった

謎のIS（後書き）

明日からテストだ・・・

鬱だ・・・

たゝすゝけゝてゝ

死の予感

side一夏

「だ~~~~!!なんで当たらないんだよ!!」
「何やってんの!?ちゃんと当てなさい!!」

敵ISがレーザーを撃つ
それをギリギリで避ける

「くそ!」

マズイ!?どうにかしないと!?
すると不意に

『焦った時こそ落ち着け』

親友の言葉を思い出した
そうだな・・・

一回深呼吸する
そして落ち付いて敵を観察する
そして一つの疑問が生まれる

「なあ、鈴。あいつ、機械じみてないか?」

「はあ?ISは機械よ」

「そうじゃなくてさ、アレって本当に人が乗ってるのか?」

「あんたそこまで馬鹿になったの?ISは人が乗らなきゃ動かな

—」

ココで鈴も何かに気付いたのか、言葉を止めて考えにふける。

「——そういえばアレ、さっきからあたし達が会話してる時ってあんまり攻撃してこないわね。

まるで興味があるみたいに聞き耳立てて…」

ココまで考えるが、やはり答えは同じ方へと傾いてしまった。

「うっん、でも無人機なんてありえない。

ISは人が乗らないと絶対動かない。そういうものなもの」

鈴の考えは一般としては正しい。

「仮に、仮にだ。無人機だったとしたらどうだ？」

「なに？無人機なら勝てるって言うの？」

「ああ、人が乗ってないなら全力で攻撃しても大丈夫だしな」

「その攻撃が当たってないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね？じゃあ、そんな事絶対にあり得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましようか」

「おし、俺が合図したらアイツに向かって

衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？ いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくても」

考えはあるけど、説明したら時間がかかる
さて行くか・・・

その時

『一夏あつ!!!』

アリーナのスピーカーから彼にとって聞き覚えのある声、
箒の声が全体に響き渡った。

あまりの大声でキーンとハウリングしている。

『男なら…、男なら、そのくらいの敵に勝てなくて何とする!!』

まずい!!

ISが箒の方を向いた

「鈴!やれ!!」

「わ、わかったわよ!」

いきなりの事に一瞬たじろぐがすぐに行動をとる。

もう撃ち出すと言う時、一夏は何を考えたのか射線上に躍り出る。

「ちょ、ちよつと馬鹿!何してんのよ!?!どきなさいよ!」

「いいから撃て!!」

「ああもつ…!どうなっても知らないわよ!」

ドオン!!!!

撃ち出された衝撃を体感じて、一夏は

瞬時加速を作動させる。このシステムは慣性エネルギーを
内部に取り込んで爆発的な加速を作り出すモノ。

普通なら自身のエネルギーを使うのだが、

外部からのエネルギーでも使う事が出来る。

しかもエネルギー量に比例して速度が上がるため、
今の一夏は弾丸その物になっていた。

「うおおおおおおお!!!」

——『零落白夜』を使用可能。エネルギー転換率90%オーバー——

（守ってみせる……千冬姉を、箒を、セシリアを、鈴を、海斗を、そしてこれから関わる人の全てを……俺が!!!）

「おおおおおおおおおおおッ!!!」

咆哮。敵ISが反応し振り返りざまに突き出した右腕を切断

「——っ!!!」

しかし残った左腕で一夏を殴り飛ばした。

「ぐはぁっ!!!」

全力攻撃後の無防備な所を喰らい、更に眼前の砲門にエネルギー反応ゼロ距離から、一夏を完全に鎮めるつもりらしい

「「一夏!!!」」

「…狙いは？」

『完璧ですわ!』

直後。上方から襲い来るレーザーの雨。

その尽くが敵ISを撃ち抜く

その機能停止を、ハイパーセンサーが知らせた

『ふう……ギリギリのタイミングでしたわね』

「いいや。セシリアならきつと、やってくれるって信じてたさ」

『っ……!?!? そ、それはもう……当然ですわ』

敵ISの再起動を確認
ロックされています

「つ！？」

「どうしました？」

「くっそおおおおおおおっ！！」

「噓！？」

「一夏！！」

「間に合えー!!」

左腕を向け、既に大出力攻撃を構えている

敵ISに向けて雪片式型を振るう

左腕を切り、レーザーは出なかったが溜まっていたエネルギーがその場で暴発して一夏を巻き込んで爆発を起こした

Side out

その場に残ったのはボロボロの一夏と
木端微塵の敵ISだけだった

「一夏！？一夏あ！！！」

「夏さん!!」

「何してんの一夏!？」

3人は一夏に駆け寄り、すると

ズドオオオオオオオオオン!!!!

「「「!?!?!?!?」」」

纂たちがたじろぐ

そうだろう

なぜなら・・・今倒したのと同じISが五機もあれば

Aピット

「なんだ、あいつらは!?!?」

「わかりません!?!?どうしますか!?!?

まだ扉はロックされていますよ!?!?」

その間にセシリアと鈴のISは集中砲火にあい
シールドエネルギーが尽きてしまう

「教師の到着はまだか!?!?」

「それが――」

「どうした!?!?」

「この機体と同じISが二機、倉庫に降りてきて、
今更敷会長が戦っています。がまだ時間がかかるそうです!」

「――」

ということとは・・・

あの4人の公開処刑が決定したようなものだ
織斑先生は画面に目を向ける

敵IS五機は一夏たちに砲身を向けるところだった

「――やめろ・・・」

エネルギーをチャージする

「やめてくれえー!!」

そして

「一夏ああああー!!!!!!!!!!」

レーザーが放たれた

死の予感（後書き）

うわ、終わるかたびみよー

新たな武器

「う、うわ——！！！！」

「織斑先生、織斑先生！！！！しっかりしてください！！！！」

「一夏、一夏、一夏、一夏、一夏あ！！！！」

殺意を込めた目で画面を見る、

煙が晴れ始めていた

そこには……………

繭みたいなもので覆われた一夏達の姿があった

「どういう事だ！？」

うれしさ半分、戸惑い半分といった様子だと
すると

ズドオオオオン！！

また何か降ってくる
すると煙の中から

「ギリギリ間に合ったな」

暁を纏った海斗の姿があった

少し前 倉屋敷のビル

「はいこれ、貴方のIS」

「助かるぜ、亜希子さん」

俺はISの武器ができたと亜希子さんから連絡が来たので
倉屋敷のビルに取りに来ていた

「でも、あなたが注文した鋼系だけど、
少しすごいわよ、まずその鋼系は感覚を共有できるようになってい
るわ」

「どういうことだ？」

「例えばあのドアの裏の光景を見たいとする、
だけどドアが邪魔で見る事が出来ない、
だけどこの鋼系をドアの隙間から通してみると
ドアの裏が見えるとかね」

「触覚や聴覚も共有できるのか？」

「そういうことね、後もうひとつ、
この鋼系はエネルギーを吸収して、
貴方のエネルギーにしたり放出したり出来るから」

「それはすごいな・・・」

「でも貴方にあつかえるの？」

「どうしてだ？」

「この鋼系は1本1本考えて動かさないと

いけないわけ、だから100本動かしたいなら
100本分考えないといけないのよ・・・
それでも扱える？」

「まあ、頑張るよ。じゃあ亜希子さん、
友達がクラス対抗戦で戦ってるから俺は帰るぜ」
「はい、また着てね」

俺は倉屋敷のビルを出た

帰路の途中

ISのプライベートチャンネルから通信がきた

『朝霧君！今どこに居ますか！？』

慌てた声で山田先生が問う

「倉屋敷のビルの前だが、どうした？」

『今、アリーナに謎のISが降って来て織斑君が
戦っています、多分ISが使える男子が目的かもしれませんが
確認をとりたかったんです』

「今どっちが勝っている？」

「敵のISですね・・・しかしもうすぐ教師たちが
取り押さえますから安心してください」

「わかった、俺は人通りの多いところで待機してればいいんだな？」

「お願いします」

通話が切れた

他にすることがあるんだろう

俺は近くの喫茶店で外の席をとりコーヒーを注文する
さて・・・とりあえず暁を指だけ

部分展開し鋼糸を空に放つ

鋼糸の太さは約1μ（マイクロ）だったから、

まあ一般人には見えないはずだ

理由はIS学園の状況を見ようと思ったからだ
だか何かジェット音が聞こえてきた

（何だ・・・？）

周りを見るも飛行機は見えない

とりあえず鋼糸をもう1本だし

1本は全速力で学園へ、もう1本は

雲の上まで行きあたりを見回す

そこには・・・七機の全身を装甲で覆ったISが
通り過ぎる所だった

（何かの実験か？まあいい・・・それよりも）

IS学園のほうが気になる

俺は第2アリーナの上まで鋼糸を送ると

信じられないものを見た

（さっきの七機のISと同じISだと！？）

嫌な予感がした。さっきの七機が

向かっていた方向はIS学園

あれは援軍という可能性が出てきた・・・

「くそ！！」

俺は喫茶店を出ると路地裏に行き、暁を展開する

鋼糸を1000本、約1mm分の鋼糸をまとめてIS学園に送る
まとめればその分考える事は同じになり負担が軽くなる
そして空中に飛ぶと

「光迅 瞬時加速付き」

無秒瞬動とは違い隠密性は無いが
無秒瞬動の10倍の速さを誇る
これを使いIS学園に急いで向かう
先に着いた鋼糸から見た光景は・・・
五機のISに囲まれてレーザーを
放たれる寸前の一夏達だった

（間に合え！！）

俺は鋼糸を散らばし一夏達の周りを囲む
レーザーが発射された時には何とか囲み終わった

（危ねえ・・・）

放たれたレーザーを吸収し、
一夏達をなんとか守りきった
それと同時にやっとIS学園の敷地に入る
そして・・・第2アリーナの
遮断シールドに空いていた穴からコロシウムに着陸する
そして周りを確かめてから

「ギリギリ間に合ったな」

無意識にこう言っていた

（良かった・・・気絶しているだけっぽいな）

俺の新しい武器、鋼糸の中に居る一夏達の無事を確認すると俺は目の前に居る五機のISに視線を向ける

「てめえら、人様の友達に何してんだ？」

殺気を飛ばす。だが一切反応しない

（どういう事だ？）

微動だにしないのはおかしい
それに奴らから生氣を感じない
無人機なのか？
すると

『朝霧！！！！』

「うるせえよ、織斑先生」

『そんなことどうでもいい！！一夏達をつれて逃げろ！！』

「いやだね」

『何故だ！？』

「だってさ、こいつらを倒さないところら辺に居る連中全員死ぬぜ？」

『しかし！？』

「なら俺以外でこころら辺にIS持っている奴いるのか？」

『ッ！！』

「さて、なら決まりだ」

『待て！！朝ぎ・・・』

通信を切る

さてと

「やりますか」

すると敵IS五機は俺に向けてもう一度レーザーを放つ、

俺は鋼系で自分の周りを囲むと同時に敵IS一機に向けて鋼系を放つ

レーザーを吸収すると同時に敵IS一機を鋼系で縛ると

さつき吸収したレーザーと今のレーザーを

一気に放出し敵IS一機を粉碎する

ここまで2秒

（残り四機）

俺は無秒瞬動を使い一番遠くに居たIS一機に近づく、

その際に別のISに鋼系を付ける

「鎧通し」

鎧砕きとは対象的で鎧砕きは鎧を破壊するが

鎧通しは鎧を破壊せず、内部にダメージを与える

此処での鎧はISのシールド、内部はIS本体

即ち本体を粉碎する

ここまでの合計3秒

（残り三機）

先ほど付けた鋼系を引っ張りISをこっちに寄せる

「二十連拳弾」

暁のパンチ1発で大体シールドエネルギーを70ぐらい削る
それを20発ぶち込み耐えられなくなったのか粉碎する
ここまでの合計5、5秒

（残り二機）

二十連拳弾の途中にこっちを向いていた
一機のISが俺に向けてレーザーを放っていた
俺はそのレーザーに対してU字に鋼系を編み
レーザーを鋼系を通して跳ね返す
レーザーが直撃すると無秒瞬動で近づき蹴り飛ばす
それと同時に鋼系で残っていたIS一機の四肢を
大の字にするような感じで縛る
そして蹴り飛ばしたISが地に伏せた瞬間、
渾身の力で踏みつけ、コアを破壊する
ここまでの合計8、5秒

（残り一機）

俺は鋼系で最後の一機の四肢を縛りながらある技を放つ

「空波 極一点」

空波の一点集中型
その空気の弾丸は敵のISのコアを
貫通し動かなくなる
ここまでの合計10秒

「終わったか・・・」

俺は安堵のため息を付いていた

Aピット

「――」

ピットで見ていた織斑先生と山田先生は絶句していた
海斗が10秒ぐらいで敵IS五機を機能停止させたのだから

「・・・山田先生、こちらの救出はもういいから
倉庫のISの処理に全力を注げと伝えてください」

「は、はい！織斑先生！！」

こうして倉庫のISも機能停止して、
1組対2組のクラス対抗戦が幕を閉じた

新たな武器（後書き）

後少しで2巻、頑張ります！

1巻終了

放課後

生徒指導室

ここは、生徒指導室、この中で
俺と織斑先生は2人つきりである
さて、俺が何をしているかといると・・・

「お前は どうして あんな 無茶な ことを した!!」

魔王の 説教を 受けて いました、 はい・・・

「・・・」

「いいか、 あれは 実戦だ！ へたを したら 命はない！

しかも5対1だぞ！！わかってたのか！！」

「・・・すいませんでした」

「・・・もういい、お前が無事で良かった」

「・・・」

俺は無言で頭を下げ生徒指導室から出て行った

その後、俺は果物を買ひ

一夏達の様子を見ようと保健室に向かっていた

あの時のメンバーは怪我をして保健室にいるからだ

「よお、元気か？」

俺はドアを開け中に入る

「おお、海斗！」

「これ、お土産」

俺は手に持っていた果物を渡す

「ん？筭達は？」

「俺が起きた時にはいなかったな」

「そうか」

「なあ、海斗」

「何だ？」

「お前は昔・・・」

「一夏、俺は昔の事については何も言えない」

「何でさ・・・」

「俺は……すまない、
身体に気をつけろよ」

俺は保健室から出て行った

学園の地下五十メートル

そこには、レベル4権限を持つ関係者しか入れない、
隠された空間だった。

「織斑先生。あのISの解析結果が出ました」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは——無人機です。
どのような方法で動いていたか不明です。

織斑さんの最後の攻撃で

機能中枢が焼き切れていました。

朝霧君が交戦していたIS五機は機体ごと粉碎、
もしくはコアの完全な破壊によりだめでした。
更敷会長もそんな感じです」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた千冬の発言に、
真耶は怪訝そうな顔をする

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ——な」

そう言った千冬だが、一つ心当たりがあった

そう思いながら、千冬はただディスプレイを見つめていた

side 一夏

「お引越しです」

「はい？」

部屋に帰り簾が作ってくれた味無しチャーハンを食べていたら、山田先生が訪ねてきた。そしてさっきの言葉である。

「……先生、主語を入れて喋ってください」

「は、はいっ。すみませんっ。えっと、お引越しするのは篠ノ之さんです」

それじゃあすぐにやっちゃいましょうっと山田先生が部屋に入ろうしたら簾が一言。

「そ、それは、今すぐではないといけませんか？」

箒の意外な言葉で、山田先生は驚いた。

「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活をするというのは問題がありますからね」

「い、いや、私は——」

「そんな気を遣うなくて。」

箒がいなくてもしっかり起きれるし歯も磨くぞ」

「——！先生、すぐに部屋を移動します」

「は、はいっ！じゃあ始めましょうっ」

「さーて、寝るか」

俺はする事なかったなので寝る事にする

コンコン

ノックが響く、俺はドアまで行きドアを開けた。

「はい、どちらさまでって箒、なんだ？忘れ物か？」

俺がそんなふうに問うと

「い、一夏——」

「うお、どうした!？」

いきなり大声を出されて、俺はびっくりしてしまう

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが…」

学年別個人トーナメントとは、六月末に行う自主参加の個人戦らしい

「わ、私が優勝したらー」

「っ、付き合ってもらっ!」

「・・・はい？」

訳がわからなかった・・・

s i d e o u t

1024号室

一夏との保健室の会話の後

俺は自室に戻ろうとしていた

その時俺の部屋にある一通の手紙が来ていた
内容は

明日の日曜日、神崎の家に来い

というものだった

1巻終了（後書き）

やっと1巻が終わりました

さて、突然ですが1週間ほど休載させていただきました
理由は・・・左手が捻挫してしまったんです、はい

この文は右手で打っております

整骨院などの病院に通っているのなるべく

急いで直したいと思います

すいません

では1週間後に掲載します

（直ってなくても何とか右手で1週間ほど頑張っ
て打ちます）
さようなら〜

二巻開始（前書き）

おひさしぶりです

さて、一週間療養しましたが
左手は治りませんでした

orz

まあ、書置きを出して行きます
では

二巻開始

日曜日

俺は一夏が友達の家に行くから一緒に来ないか？
という誘いを断って、指定警護区域の中にある
神崎の家に来ていた

「なんなんだ、いつたい・・・」

俺は神崎の家に来るとある道場で待たされていた

「しかし綺麗だなー」

床や壁の磨き方がすごい綺麗だ

さすが金持ち・・・

そして・・・

「こんなにリアルな置物は初めて見たぜ」

道場の真ん中に80歳ぐらいのジジイの置物が飾ってあった
スゲー・・・とにかく何時動いてもおかしくないリアルさだ

「世界の技術はここまで進んでいたのか・・・」

「さて、何時になったらわしに話しかけるのじゃ？」

「うお！？置物がしゃべったぞ！？」

「誰が置物じゃー！！」

「いや、息してなかったし・・・」

「わしくらいの達人になると3分は息を止めていられるわい。」

こつ、ずーと我慢しておると死んだバーさんがこつ、手を振ってくれての・・・」

「あんだ、それ死にかけてるからな・・・」

「まあ、おふだけはここまですて少しかけなさい」

爺さんの目の前にある座布団へ促す

「わかった」

俺が座ると

ブ~~~~~!!

「やゝい！ひつかかった、ひつかかった!!」

「・・・帰る」

「まって！爺の小粋なジョークじゃよ、ジョーク！」

「・・・」

俺は座布団には腰をかけず、床に座る

「で、話はなんだ？」

「・・・」

「おい爺、聞いてんのか？」

「・・・」

「死んだか・・・誰か、救急車を呼んでくれ」

「生きとるわ、馬鹿者!!」

「わかんねえぞ、80超えた爺なんて何時死ぬかわかんねえ・・・」

渴!!!!!!

「うおー!!」

何だこの爺さん！？大気を震わせるなんて、化け物か？

「馬鹿者！わしはまだ、ピッチピチの78歳じゃわい」

「78歳はピッチピチじゃねえよ・・・」

「それよりお主、名はなんと言う」

「朝霧海斗だ」

「わしは神崎佃五郎じゃ・・・それより朝霧海斗と申したな」
「・・・ああ」

いきなり雰囲気が変わった

「むう・・・」

「？、どうした」

「率直に聞く、海斗よ・・・」

「なんだ？」

「お主の父親は・・・雅樹か？」
「・・・」

倉屋敷に続き今度は神崎が親父の名前を出すだと？
いったいどうなっているんだ？

「どうしたのじゃ？」

「何でお前ら金持ちは俺の親父を聞きたがるのかねえ・・・」
「やはりか！！百利は今何をしておる！？」

「母は死んだぜ、・・・それにしてもおかしいな。

最初に俺の親父の事を聞いたのに、行方を聞いたのは
俺のお袋だけだとはな・・・」

「・・・」

「何故だ」

「・・・これはトップシークレットなんじゃが・・・
ちよつと待っておれ」

こうして神崎佃五郎は部屋を出て行く

10分後

「待たせたかの？」

「構わない、それより何だ？その紙は？」

「お主は雅樹がどこに居るのか知っておるか？」

「・・・さあな」

「雅樹は今、亡国機業にいる」

「」

亡国機業

たしか五十嵐からもらった本に載っていた

裏の世界で暗躍するISを所持した秘密結社で

第二次世界大戦中に生まれ、50年以上前から活動しているらしい

また、組織の目的や存在理由、

規模などの詳細が一切不明の謎が多い組織だ

「なんで・・・、嘘だ！アイツは死んだはずだ！！」

アイツは、アイツは俺が！！！！

「ならばこれを見て見るといいじゃろう」

1枚の写真を渡される

そこには……

2人の女と一緒に歩いていた親父の姿があった

「」

俺は相馬の話を思い出していた

アイツは親父が二人の女と歩いているのを見たと言っていた。すなわちこの写真は偽造した確立が限りなく低いと言うことだ

「納得したかの？」

「……」

納得はできなかったが一応頷いておいた

「あのさ……神崎の爺さん」

「なんじゃ？」

「これから俺に親父の情報が手に入ったら俺に、情報を送ってくれないか？」

「……出来る限りはしてやろう」

「ありがとう……なあ、もう帰っていいか？
相当疲れたんだ……」

「うむ、気を付けるのじゃぞ」

こうして俺は指定警護区域を出てIS学園に帰った

考え事

次の日

（どついう事なんだ？）

俺は親父がどうして生きているかを
登校しながら考えていた

（偽者か？）

その可能性が、今の所一番高いのだ

（しかし・・・）

「おい、海斗〜」

「・・・」

「海斗？」

俺は肩を叩かれて意識が戻った
叩いた方を見ると一夏が
心配そうな目でこちらを見ていた

「大丈夫か、海斗？」

「あ、ああ、問題ない」

「？まあ、いいか。それよりさ・・・」

一夏が休みの事を話してくる

しかし俺は親父の事が気になって
あまり話を覚えていなかった

side 一夏

教室に俺が着くと

「やっぱりハツキ社製のがいいかなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。

特にスミーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

クラス中の女子たちが手にISのカatalogを持って、
あれやこれやと意見を交わしている所だった

「あ！織斑君に朝霧くんだ！」

「おはようー！」

「おう、おはよう。一体何の話をしてるんだ？」

「ISスーツの事だよ」

「ねーねー、織斑君と朝霧君のISスーツってどこのなの？」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、
どっかのラボが作ったらしいよ。

えーと、もとはイングリッド社の

ストレートアームモデルって聞いている」

「へー、朝霧君は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「朝霧君？」

クラスの子が海斗の肩をつつく

「ん、何だ？」

「だ〜から、朝霧君のISスーツはどこが作ったの？」

「ああ、・・・倉屋敷重工業だ」

「そうなんだー」

まただ。今日の海斗は少しおかしい。

話かけても気付かないし

話が終わるとすぐ何かを考えてる

「なあ海斗、大丈夫か？」

「・・・・・・」

「海斗！」

「うお！どうした」

「どうしたじゃない！お前、本当に大丈夫か？」

「一体どうしたってんだ？」

「さっきから呼んでるのに、気付かないことが多いぞ」

「ああ、少し考え事してたんだ」

「ならいいけど・・・」

「織斑君！海斗君！ISスーツってどんな役割だっけ？」

「え！？えーと・・・」

だめだ、思い出せない

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、

ISはそこで必要な動きを行います。

また、このスーツは耐久性に優れ

一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができる

す。

あ、衝撃は消えませんでしたのであしからず」

「「「「「おゝゝゝ！」「」「」

さすが先生。何でも知っているな

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから・・・って、や、山ちゃん!？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツの申込日開始ですからね。

ちゃんと予習してきてあるんです。えへん・・・って、や、山ぴー！？」

入学してから約二ヶ月

既に山田先生には8つくらいの愛称が出来ていはずだけど・・・

「あー、教師をあだ名で呼ぶのはちよつと・・・」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーさんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーさんって・・・」

「あれ？マヤマヤの方が良かった？マヤマヤ」

「そ、それもちよつと・・・」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください!!」

うお!?!怒ったぞ!あの山田先生が!?

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。

わかりましたか？わかりましたね？」

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

千冬姉が教室に入ってきた

（あ、ちゃんと俺の出したスーツ着てくれてるな）

昨日家に帰った時に、夏用のスーツを出して届けたんだけど、早速使ってくれている

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。

訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。

忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらっ。それもないものは・・・まあ下着で構わんだろう」

いやっ！！構えよ！？

仮にここには男子が二人いるんだよ！？

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はい！！ええとですね、

今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

「「「「ええええええええっ！？」「」「」」

「入って来い」

「失礼します」

「……………」

入ってきた転校生を見て、クラス中が固まった

一人は銀髪的眼帯をした女の人

そして・・・もう一人が男の格好をしていたからだ

side out

考え事（後書き）

左腕が痛い

転校生

（ん？）

おかしい。いつも騒がしいこのクラスが静かなんて

（どうかしたのか？）

何かあったと思い周りを見渡す
すると見知らぬ”女子二人”がいた

（なんで男装なんかしてるんだ？）

知らない金髪の女が男装している
何も聞いてない海斗は困惑するしかなかった

（まあ、様子を見るか・・・）

とりあえず考え事を中断し二人に意識を向ける

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。
この国では不慣れなことも多いかと思いますが、
みなさんよろしく願います」

デュノア？どこかで聞いた事あるような・・・
フランス・・・そうか！五十嵐の本に載っていた！！

フランス代表 シャルロット・デュノア

デュノア社のテストパイロットで社長の一娘

ただし実子ではあるが社長である父親の愛人の娘

専用機持ちで名前はラファール・リヴァイヴ・カスタムII

（さて、あいつはシャルロット・デュノアで間違いないだろうな・

男装しているから、目的は特異ケースである

俺や一夏との接触、つてところか？

とりあえずコイツは保留だな）

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「きゃ・・・」

「はい？」

（やばい！）

「一夏、耳塞げ」

「おう」

「「「「「きゃああああ——っ！」「」「」」

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

「・・・・・・挨拶をしるラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、
ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」

（教官？）

何故そんな呼び方をする？普通は先生だ
ということとは、織斑先生が教官をしていた頃の知り合い、
と言う事になる

織斑先生は確か・・・・ドイツでIS部隊の教官をしていたな・・・・
名前は・・・・・・シュヴァルツェ・ハーゼだっけ？

まあ、彼女はそのIS部隊の関係者となる

後・・・・シュヴァルツェ・ハーゼの隊員全員
国家機密のナノマシンを移植していたはずだ
ナノマシンを移植された人の事を、越界の瞳

ヴォーダン・オージェ

と呼ばれるらしい

越界の瞳

ヴォーダン・オージェ

疑似ハイパーセンサー。IS適合性の向上のための処置の一環で、
脳への視覚信号の伝達速度の飛躍的な高速化と、
超高速戦闘下での動体反射を向上させる働きがある。
理論上、不適合などのリスクはないらしい

この会話でわかるのはこれくらいか・・・

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「「「「「・・・・・・」」」」」

「あ、あの以上・・・・ですか？」

「以上だ」

その一言でクラスに沈黙が走る

（ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・たしかドイツの代表候補生で、シュヴァルツェ・ハーゼの隊長だったな・・・）

俺はラウラを観察しているとに眼帯に目が行った
そして思い出す

（そういえば・・・シュヴァルツェ・ハーゼの隊長は
理論上、不適合などのリスクはないといわれていた
越界の瞳の唯一の失敗作の欠陥品だったな）

笑えるな、初めての失敗作の欠陥品だなんてなあ。

いや、人の事を言えねえか、

俺はある意味完成品だが、

ある意味欠陥品だ

そんな事考えているとラウラと一夏の目があつた

「っ！・・・貴様が」

（まず！？）

ラウラは一夏に向かって手を振り下ろす

俺はその手を掴む

「！？・・・何の真似だ？」

「お前こそ何しようとした？ドイツでは初めて出会った人に
ビンタをかますのが流行ってるのか？」

「ふん、あんなクズに何しようと私の勝手だ」

「へえ。お前が人の友達を勝手にクズ呼ばわりするか、くくくっ！」

「・・・何がおかしい」

不機嫌そうな面で聞いてくる

「くくく、何がって？簡単さ。

お前がそれを言うか？

・・・境界の瞳の唯一の失敗作が（ボソ）」

最後の方をラウラの耳の近くで

ラウラ以外が聞こえないくらいの大きさで喋る

「っ！？貴様ああああ！！！」

ラウラは俺の顔面目掛けてパンチを放つ

俺はそれを最小限の動きで避け

膝撃ちをラウラの腹にかます

「ぐっ！？」

息が出来ず本能的に少し前に屈む

・・・弱いな、これなら舞や五十嵐、

相馬に楓の方が断然強い

「この程度か・・・」

俺は屈んでるラウラに向かって掌底を放ち
顎を打ち抜こうとする

しかし

パソコン！！

出席簿によってガードされていた

「そこまでだ。いいな、二人とも」

「くっ・・・はい、わかりました」

「・・・ああ」

「覚えている（ボソ）」

そして一夏に向かって

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなどと・・・！」

こうして席に戻っていく

「あゝゴホン、ゴホン！では、SHRを終わる。

各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。

一時間目は二組と合同でIS実習だ。遅れるな。

・・・それと、織斑はデュノアの面倒を見るように
では、解散！！」

よし、急がないと

「ええと、君が織斑一夏君？僕は」

「それは後でいいから、海斗！！」

「まずいな・・・かなりの気配がここを中心に集まってる。
授業に間に合うのか、かなり厳しいぞ」

「とりあえず急ごう！ほら、行くぞ！」

一夏はシャルルの手を掴み移動する
俺もその後を追った

転校生（後書き）

書置き尽きる――！！

逃走中

一夏は移動しながらこれからの説明をしていた

「男子は空いているアリーナの更衣室で着替え。

これから実習のたびにこの移動だから早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

「どうした、トイレか？」

一夏がたずねた。

「トイレ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

「来る……」

「まじか!？」

「ああ……」

すると

「ああっ、転校生発見！」

「しかも織斑君たちとも一緒！」

「いたっ、こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

「くそが！」

見つかった、

「織斑君の黒髪や朝霧君のダークブルーもいいけど、

金髪つてのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！見て見て！織斑君と手を！手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！」

今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

「男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

一夏とシャルルの会話を聞いて、
俺の予想は当たりだと確信した

「いや、普通に珍しいだろ。

ISを操縦できる男子なんて今のところ
俺達しかいないんだかる？」

「あっ！——ああ、うん。そうだね」

「さーで、どうする一夏、囲まれたぜ」

「ええ！？」

周りを見るが隙間なんてない
さてと……

「一夏、頼むぞ！」

「「え？」」

俺は一夏の襟を掴む
そして女子達の上目掛けて
おもいつきり投げた

「うわ~~~~!!」
「~~~~!!?」
「~~~~」

ドン!

一夏は女子の集団の上を通り
包囲網を突破した

「助かったぜ!海斗!!」

大声でそんな言葉が聞こえた

「今だ!」

「え——」

俺はシャルルをお姫様抱っこする

「何してるの!?!」

「すまん——」

「だから何——」

俺は返事も聞かず窓から飛び降りた

「~~~~~きゃ、きゃあああああああ!?!?!?!?」
「~~~~」

「朝霧君達が自殺した!?!」

「この世の終わりだ——!」

「いやあああああああ——!!!」

地面に着地するまでこんな言葉ばかり聞こえた

「きゃあああああああああ！！！」

腕の中にいる奴も例外じゃない
そして

ドン！！

地面に着地した

「急ぐぞ」

「え！？大丈夫なの！？」

「これぐらい平気だ」

昔は8階から飛び降りていたからな・・・

そして俺とシャルルは逃げてきた一夏と合流し、
アリーナの更衣室に向かった

「ま、何にしてもこれからよろしくな。

俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

「俺は朝霧海斗、海斗って呼んでほしい」

「うん、わかった一夏、海斗。

僕の事もシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

「ああ」

さてこんな事しているうちに更衣室に着いた
そして一夏とシャルルが何か騒いでいたが
俺はさっさと着替えて第二グラウンドに向かった

第二グラウンド

「遅い！」

バシンバシーーン！

結局一夏とシャルルは遅れていた
何してたんだ？

「時間がもつたない。とつとと列に並べ！」

「は、はい！」

織斑先生に促されてそそくさと端の方に並ぶ。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

セシリアが一夏に絡み始めた。

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

「いや、女子に囲まれた」

「なに？バカじゃないの？」

「——安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

「「え？」」

バシーン！！

ドンマイ……

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」
「「「「「「「「はい!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」」

一組と二組の合同実習のため、人数はいつもの倍近くいる

「くうっ・・・なにかとうとすぐにポンポンと人の頭を……」
「・・・一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・」

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。——凰！オルコット！」
「な、なぜわたくしまで!?!」

完全なとばっちりだな・・・

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

文句を言いつつも二人は前に出ている。

「お前ら少しはやる気を出せ。

——アイツにいいところを見せられるぞ? (ボソ)」

「やはりここはイギリス代表候補生、

わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね!

専用機持ちの!」

おおー! 何て言っただ、予想できるけど

「それで、相手はどちらに?

わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが?」

「「「「「」」」」」」

2組の奴は固まっていた

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの二対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちなら直ぐに負ける」

負けるといわれたのがよほど悔しいのだったのか、二人は瞳に闘志をたぎらせる。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。

「手加減はしませんわ！」

「アタシも手加減は無し！」

「い、行きます！」

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。

デユノア、山田先生が使っているISの解説を試みせる」

「あつ、はい！山田先生が使用されているISは

デユノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。

第二世代最後期の機体ですが、そのスペックは

初期第三世代型にも劣らないもので、

安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。

現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら

世界第三位のシェア持ち、七カ国でライセンス生産、

十二カ国で制式採用されています。

特筆すべきはその操縦の簡易性で、

それによって操縦者を選ばないことと

多様性役割切り替えを両立しています。

装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、

参加サードパーティーが多い事でも知られていま・・・

ガッシャーッ！！

「おい、ぶつかってるじゃねえか・・・」

鈴とセシリアが回避行動をとった瞬間、激突。

真耶はその一瞬を逃さず、

今まで使用していたアサルトライフルを切り替え、

グレネードランチャーを発射。

そして鈴とセシリアは負けた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。

以後は敬意を持って接するように・・・

ではこれより実習を開始する。

専用機持ちはグループリーダーをしる。

他の者は出席番号順にそれぞれのグループに均等に別れる」

「は、はい・・・」

「よし、それじゃあ始めるぞ」

こうして俺は何事もなく実習を終えることができたとき

昼食

昼休み 屋上

よし、今の状況を確認しよう

俺は一夏に昼飯と一緒に食べないか？と言われた承した。

そして屋上で食べるからと言われ、

売店でパンを買ってきたから少し遅くなった

そして屋上に着くと一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルがいた
それけならまだいい、箒がものすごく怒っているのだ

（何してんだよ、この鈍感野郎・・・）

「・・・どうということだ？」

わかる！わかるぜ箒！

多分一夏はお前に誘われたのだろう

この状況は俺でも予想出来ない

俺も説明してほしいしな！

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな・・・」

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。

それにシャルルは転校してきたばかりで右も左も分からないだろうし」

「そ、それはそうだが・・・」

「えっと、僕も一緒にいいのかな・・・？」

「一夏がいいなら、どうでもいいんじゃないかね・・・」

「うん」

「・・・それよりさ、さつさと食おうぜ?」

一応話を進める

「それもそうだな」

「はい、一夏。アンタの分」

「おお、酢豚だ!」

「そ。今朝作ったのよ。」

「アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

なんと鈴は、酢豚の入ったタッパーを一夏に渡していた

「コホンコホン。——一夏さん、わたくし、

今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、

こういうモノを用意してみましたの。よろしければどうぞ」

バスケットの中を見せる、

そこにはきれいに並べられた

サンドイッチがあつた

やめるお!やめてくれえ!

これ以上ややこしくしないでくれえ!!

「お、おう・・・後でもらうよ」

「?どうかしまして」

「いや!どうもしていない!」

一夏、どうした!?顔真っ青だぞ!

「はつきり言わないからこうなっちゃうのよ、バーカ・・・」

ああ、まずいのか

「良かったらみなさんもどうぞ」

「?!?!?!」

箒と鈴も顔が真っ青になった

「一個だけ・・・」

「さて!? 早まるな海斗!!!!」

俺は注告を無視してサンドイッチを食べる
その瞬間、口中に広がる凄まじいまでの甘さ
バニラエッセンスの香り
でも俺は戸惑うことなく食べきった

「――」

3人の顔が引きつっている

「どうした?」

「だ、大丈夫か、海斗?」

「ああ、確かに不味かったが食べなくてはねえよ」

「不味いですって!?!」

「そつだろ、何故BLTサンドがこんなに甘くなるんだ?」
「くうううううう」

「昔食ってたものより美味かったから食べたんだ」

「何を食べてたんだよ・・・」

「そこら辺に生えてる草、虫、スズメ、ネズミ、泥」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何かジトーと睨まれている

「嘘だろ」 b y 一夏

「嘘だな」 b y 篝

「嘘に決まっていますわ」 b y セシリア

「嘘よ」 b y 鈴

「嘘じゃないの？」 b y シャルル

「嘘じゃねえーよ」 b y 俺

「それならさ・・・」

すると鈴は飛んできたトンボを捕まえる

「これ食べて見てよ」

トンボを差し出してきた

「おい、鈴！」

「だってできるんですよ。やってみてよ」

「だからって・・・」

「いいぞ」

「「「「「え？」「」「」「」

俺はトンボを口に入れる

グワシャ

トンボが噛まれた音がした

「「「「「!?!?!?!?」「」「」「」

「これでいいか？」

「すいませんでした!!」

鈴がいきなり土下座した

「はい？」

「悪ふざけをしてすいませんでした!!」

「いや、どうでもいいんですが・・・」

うまかったし

「それよりさ、箸の持って来てるものをさっさと出して
食ってしまおうぜ」

「あ、ああ・・・私のは、これだ」

「おお！これはびっくりだ」

箸の渡した弁当箱の中身は、やはりオーソドックスなお弁当
だが、一つ一つが手の込んだ物のようだ。

「でも悪いな。俺の分まで作ってくれてるとは・・・
いや、もつべきものは幼馴染か」

おい、鈴がめっちゃ睨んでるぞ

「勘違いするな。たまたま、作り過ぎてしまっただけだ」

「分かってるよ。それでも嬉しいもんは嬉しいってことだよ。じゃ、
早速・・・」

と、一夏は弁当箱から唐揚げをチョイスして、口に放り込む。

「……ど、どうだ？」

「おお、うまいなこの唐揚げ。えらく仕込みが込んでるな・・・シヨウガと醤油、後は・・・何だろ？」

「おろしニンニクにコシヨウを少しだけ混ぜてある。大根おろしも良い隠し味になる」

「へえ、凄いな、箒」

「こ、これくらい普通だ」

「あれ、箒のやつには唐揚げは入ってないのか？」

「うつ！？ いや、私はその・・・ダイエット中なのだ」

「でもさ、せつかくだから食べよ」

「「！！！！」」

「夏は唐揚げを取って、そのまま箒の前まで持っていく

「なつ、何を・・・！？」

「ほら、食ってみろって」

「い、いや・・・その、だな・・・」

「...あ、あゝん（パクツ）」

箒は戸惑いつつも、パクリと唐揚げを食べる。

「・・・うん、良いものだな」

「だろ？ 美味しいよなあ、この唐揚げ！」

「いや、唐揚げではないんだが・・・うん、実に良い」

「・・・？」

「あつ、これが日本のカップルがするっていう『はい、あゝん』っていうやつなのかな？ いや、二人とも仲睦まじいんだね」

「何言ってるんだ！？！？」

この天然！最悪な言葉を放ちやがった！！

「はあっ！？ 何でその二人が、仲睦まじいになるのよ!？」

「そ、そうですね！ やり直しを要求しますッ!！」

「お前ら！もうどうでもいいからさっさと食べー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

最近知的でクールな俺が崩壊しているような・・・

とにかく昼休みは一応無傷で終えることができました

放課後

side 一夏

結局シャルルは俺の部屋に住む事になった

「じゃあ、改めてよろしくな」

「うん。よろしく、一夏」

俺達は部屋に戻ってお茶を飲んでいた

「紅茶とは随分違うんだね。でもおいしいよ」

「おお、それは良かった!」

「ねえ一夏」

「何だ?」

「放課後にISの特訓しているって聞いたんだけど
僕も参加していいかな?」

「本当か!? 助かるぜ、シャルル」

「じゃあ疲れたし、そろそろ寝ようか?」

「そうだな。おやすみシャルル」

「おやすみ一夏」

こうして俺は眠りについた

シャルルの過去

side一夏

5日後

シャルル達が来て5日がたっていた
俺はアリーナで特訓していた

「一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは
射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応、理解してるつもりなんだが・・・」

「知識として知っているだけって感じかな。」

さつき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うつ・・・瞬時加速も読まれてたしな・・・」

「お前、剣道を少しまじめにしたらどうだ？ 接近戦しか
まともに出来ないんだからさ」

「そうはいつでもな・・・」

「特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても
軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か・・・うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあまり無理に軌道を変えない方がいいよ。
空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、
最悪の場合骨折したりするからね」

「・・・なるほど」

「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

「ああ、何回か調べてもらったんだけど、
拡張領域が空いていないらしい。」

だから量子変換は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「チートすぎるよな、零落白夜って」

「どうでもいいだろ!？」

「ま、まあとりあえず、射撃武器の練習を試みようか。はい、これ」

一夏に渡したのは、55口径アサルトライフル《ヴェント》だった。

「え？他の奴の装備って使えないじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ」

「へえ〜〜」

「じゃあ、撃ってみようか」

俺は脇を占めてヴェントを構える

バン！

「どうだった？」

「なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

すると周りが騒がしくなった

「ねえ、ちょっとアレ・・・」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

上の方を見るとシュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラがこちらを睨みつけていた

side out

「おい」

「・・・なんだよ」

ラウラが一夏の方を睨み付けていた
恨みがあるらしいからな、ラウラは

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と闘え」

「イヤだよ。理由がねえ」

「貴様にはなくても私にはある

貴様がいなければ教官の大会二連覇の偉業を
なしえただろうことは容易に想像できる。

だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

「!？」

実弾砲を発射してきた。

シャルルは盾を構え一夏の前に立つ

俺はその間に鋼糸をラウラの周りに

送り撒いておく

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、
ドイツの人は随分沸点が低いんだね。

ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様・・・」

「いい加減にしとけよ」

「そういえば朝霧、お前にも復讐しなければ
いけなかったな」

「ごちゃごちゃうるさいんだよ。弱い奴はさっさと帰れ」

「・・・殺されたいのか？」

「できるのか？お前なんか、人を・・・

いや悪魔に成り果てた男を殺せるのか？

精神的な意味じゃないぞ、

実力的な意味でだ」

俺はそう言いながら周りに撒いていた鋼糸で

ラウラを縛る

「ッ!？」

「殺せるのか？今のお前に」

もう一度俺は問う

「貴様!!!!」

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え!』
「ちっ」

俺は鋼糸を解く

「命拾いしたな」

「覚えてろよ!」

ラウラは戦闘状態を解除してアリーナゲートへと去って行った

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

「一夏、結局なんで絡まれたの？」

「そうだぞ一夏、なんであの女が仕掛けてくるのだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おいー・・・・・・・・」

「今日はここまでだ。みんな戻るぞ」

「何言ってるの海・・・・・・・・」

「わかった、・・・・・・・・じゃあな」

「一夏！？」

「どこにいく、一夏！！」

「・・・・・・・・」

無言で一夏は去って行った

「海斗！！何故あんな事を言った！！」

箒が襟を掴んでくる

「誰にでも話したくないことはあるだろう？」

「・・・・その貴公子さんにもな」

「！？！？」

「どうしてシャルルが出てくる！？」

「さあな」

俺は手を払い、ロッカーへ戻る

「一夏、大丈夫か？」

「ああ、海斗か・・・・さっきは助かったよ」

「なに・・・・俺は先に帰るぜ」

「着替えないのか」

「シャワー浴びたいんだよ」

こうして俺は寮に帰った

トントン

寮のシャワーを浴びて少ししたらドアがノックされた

「何だ？」

俺はドアを開ける

「……………」

「一夏？」

「俺の部屋に来てくれ……………」

「？わかった」

こうして一夏の部屋に行く

すると中で…………女の姿をしたシャルルがいた

「なるほど、ばれたのか」

「やっぱり知ってたんだ……………」

「ああ」

「海斗、知ってたのか!？」

「まあ、で…………何故男装していたか教えてくれるのか？」

「うん……………」

「それで…………なんで男のフリをしてたんだ？」

「うん？実家って言うと、デュノア社の――」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」
「命令って・・・親だろう？なんでそんな――」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

「っ！？」

「・・・・・・」

「あれ？海斗は驚かないんだね」

「予想が的中したからな」

「どういう事だ？」

「いいよ、僕が話す。・・・引き取られたのが二年前。

ちようどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でISの適応が高いことがわかって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットやることになったね」

俺も一夏も黙ってシャルルの話を聞いている

「父にあつたのは二回くらい。会話は数回くらいかな。

普段は別邸で生活をしているんだけど、

一度だけ本低に呼ばれてね。あのときはひどかったなあ。

本妻に人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。

参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれてたら、

あんなに戸惑わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声はちつとも笑っていなかった。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？だってデュノア社って量産機ISのシェアが世界第三位だろ？」

「一夏、デュノア社のリヴァイヴは結局第二世代型のISなんだよ。IS開発は物凄くお金がかかって、ほとんどの企業は国からの支援があつてやつと成り立っているところばかりだよ。」

それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』

から除名されているからね。

第三世代型の開発は急務なの国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

「イラつくな、その父親」

「どういう事だ？」

「デュノア社は第三世代型のISを開発していたが、イグニッション・プランから除名され、国からの援助がなくなったそして男子のふりをし、広告塔としてIS学園に送り込んだそして・・・俺達のデータを盗めとでも言われたのだろう」

「そうだよ。同じ男子なら日本で現れた特異ケースと接触しやすからってね」

「とまあ、そんなところかな。でもばれちゃったからきつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。」

デュノア社は・・・僕にはどうでもいいことかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘ついててごめんね」

「いいのか、それで」

「おい、一夏」

一夏がシャルルの肩を掴んでいた

「それでいいのか？いいはずないだろ。」

親が何だっというんだ。

どうして親だからってだけで自由を奪う権利がある。

おかしいだろう、そんなこもんは！」

「い、一夏……？」

「親がいなければ子供は生まれぬ。そりゃそうだろうよ。」

でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、

そんな馬鹿なことがあるか！生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。

それを、親なんか邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

「っ」

きつと一夏はシャルルのことを言ってるんじゃない。たぶん自分のことを言ってるんだ。

「一夏、落ち着け！」

「あ、ああ・・・悪い。つい熱くなってしまった」

「一夏、どうしたの？」

「俺は——俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ・・・」

「・・・・・・・」

おそらく資料で知っていただろう『両親不在』の意味を理解したらしく、

シャルルは申し訳無さそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしなくてもいい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親なんて今更会いたいと思わない。

それより、シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって・・・時間の問題じゃないのかな。」

フランス政府も事の真相を知ったら黙っていないだろうし、

僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないのかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

「・・・だつたら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第二一、

本学園における生徒はその在学中において

ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。

本人の同意がない場合、

それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「おお、良くこのタイミングでいえたな」

「まあな、とりあえずこの学園にいれば、

すくなくとも三年間はフランス政府も手出しが出来ない。

その間に方法を見つければいい」

「一夏・・・」

「シャルルも親の事なんかきにするな、

それより海斗」

「なんだ？」

「俺達の過去も話したんだ。少しだけ教えてほしい。

・・・悪魔に成り果てた男ってどういう意味だ？」

「・・・覚えていたのか」

「ああ」

「答えられない」

「何でだ！？何でいつも隠そうとする！！」

「聞かれたくないからだ」

「っ！！」

俺と一夏はにらみ合う

「「」

「ちよつと二人とも!？」

「はぁ・・・意味だけな」

「え——」

「お前が聞いてきたんだろうが」

「お、おう」

「・・・狼に育てられた人間の話を知っているか？」

「狼に育てられた人間の話？」

「そうだ、狼に育てられた人間は狼になるんだ」

「「え?」」

「姿形がという意味じゃない。

精神的な面のことだ。

狼に幼少期から育てられた人間は手も使って歩き、

食べ物も狼と同じ物を食べるようになる」

「それがどうかしたのか？」

「わからないか? 狼に育てられた人間が狼になるように
悪魔に育てられた人間は悪魔になるって事だよ」

「「?」」

「だから——」

この気配は・・・セシリア!?

「おいシャルル!! 布団にかくれろ!!」

「え、ええ!？」

「急げ!!」

「わかった!」

シャルルが布団の中に入る

「どうかしたのか!？」

トントン

「一夏さん、いらつしやいます？」

夕食をまだ取られていないようですけど、
体の具合でも悪いのですか？」

「!?!」

ギリギリセーフ

「ああ、セシリア。今シャルルが熱が出ているって一夏から
聞いたから二人で看病していたんだ」

「そうでしたの・・・一夏さんを借りてもいいですか」

「ああ、いいぞ」

「では一夏さん、行きましようか？」

「ついでにシャルルの飯も持って来てやれ」

「お、おう」

「ごゆっくり〜」

こうして一夏とセシリアが出て行く

「・・・じゃあシャルル、俺は寝るわ」

「う、うん。おやすみ」

「ああ、じゃあな」

こうして俺は自室に戻り眠りについた

シャルルの過去（後書き）

すいません遅くなって。

最近電気工事士の補習が長くなって

まったく書く暇がありません

どうかよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5814s/>

IS 暁を名乗るもの

2011年5月29日10時58分発行